

# 研究紀要

第5号

1989

財團法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団

# 研 究 紀 要

第 5 号

1989

財團法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団

## 目 次

- 井草式土器及び周辺の土器群について 宮崎朝雄・金子直行…… 1
- 東国における後・終末期古墳の基礎的研究(1) 田中広明・大谷 徹…… 71
- 終末期古墳出現への動態 I 田中広明……139  
——変容する在地首長層と造墓の展開——
- 古代集落遺跡の再検討 井上尚明……179  
——郡衙・郷家・一般集落——

# 終末期古墳出現への動態 I

## —変容する在地首長層と造墓の展開—

田 中 広 明

### はじめに

古墳の造営は、崩御した被葬者を他界させるための葬送行為の一端である。また同時に造墓は、葬送の実行者にとっては、被葬者の保持していた社会的な分掌を継承することを、自己の属する集団の内外に周知させる絶好の場であったのである。

ところで我々が問題視するのは、だれが造墓を指揮・監督・管理したかである。古墳の造営にあたり、大王家のみが寿墓（寿陵）を築く一人称として特別視するなら（註1）、それ以外の岩戸山古墳や、今木の双墓は、緊張状態の中で成立した異例の造墓活動なのであろうか。

一般的な造墓の経過を示すという、蘇我馬子の墓の場合を考えてみよう。次期の氏上であり、馬子の諸々の権益の継承者足り得た蝦夷が、馬子の崩御後、その認証をめぐり境部臣摩利勢と争う一連の記事がある。これが、この次期の氏族内部の葛藤を示していると同時に、造墓が継承者によって行なわれたことを示していよう。

この諸権益の継承は、ある政治的生命の消失を契機に、設定してもよいかもしれない。氏上としての政治的諸権利の放棄が、崩御のみではなく、生存途上であってもありえたと考えられるためである。蘇我蝦夷が入鹿へ大臣を譲渡した一件や、山背大兄王の蟄居など示唆する記事は多い。つまり古墳は、埋葬施設の形態こそ変化したが、次期首長予定者が、継承者として認証される場であり、またそこで行なわれる継承儀礼の執行は、そこに集う人々が、ある共通した（血縁的・地縁的）目的のために結集した形態の反映といえる。つまりその結集形態こそが、在地社会の諸機能の反映なのである。これが、遺体が埋葬される過程で確認され続ける。おそらく追葬は、そうした核となる被葬者と、その関係者の間で取り交された血縁的組列の反映であろう。

群集墳の形成が、同族意識と墓域の限定といった、表裏一体のシステムの中で発展した背景に、在地社会内外に対して喪主が、継承者としての認証を受ける必要性が、高まったからであろう。

この結集形態の確認は、墓前において取り交された葬送儀礼や誅で達成されたと考えられる（註2）。考古学的にこの行動を痕跡としてとらえることは、非常に困難である（註3）。ただしこの行動の場、墓前から墓室への空間のあり方は、比較的視覚性に富んでいる。この場（空間）の設定こそが、次期継承者にとって急務であり、またそれは、在地社会内外の諸関係を整理することでもあった。こうした継承者の認証の問題は、3～4世紀の倭国内の葛藤と大陸・半島の活動のなかから必然的に成立し、7～8世紀には、国家が保証する形で、国家が継承者を抜擢することによって崩壊

した。

さてこの空間が最も良好な痕跡として残るのが、6～7世紀に盛行した横穴式石室（前庭部も含める）である。先に述べた追葬と血縁関係の認証を前提として、横穴式石室は、ほぼ日本全土に限なく浸透していった。

各地でもその導入当初は、大型の首長墓に限られ、形式的に同一性が認められる。これは在地社会外の交通権を掌握していた在地首長層に、その共同体認識上に波及したと考えられる。またこうした初期横穴式石室の共通性は、交通関係の成立を前提とした臣連大夫層の大王墓における葬送儀礼への参加に反映している。初期横穴式石室以降も、地域を超えた同一性の存在を解明する糧となる。現象として在地的な形式が多く派生した横穴式石室は、その成立する段階に在地首長層下の村落首長層が、在地首長層の葬送儀礼に参加する中から、あるいは移動によって成立していった。ここに横穴式石室を、同時期的な各種共同体的諸関係の認証の場として意義付けることができる。このことは逆に、横穴式石室の分析を通して、在地共同体の結集形態の姿を葬送儀礼のなかに求めていける希望を与えていている。

## 第1章 赤城山南麓の共通した墓前祭祀—群集墳間の結集形態—

近年、群馬県の赤城山南麓で、広域的に数多く調査された群集墳に一つの傾向が探れる。それは横穴式石室の前庭部を大きく凹地状に掘り込む、「前庭状ピット」を造作した一群である。ある在地共同体の結集の一侧面を、この出現と変化のなかに確認しておきたい。

ところで「在地的」という表現を使用したが、このことについて若干補足説明をしておきたい。我々が、一般的に使用する「在地的」「在地性」といった単語は、生産が、継続的かつ連続性を根底とした変化の痕跡をもって確認し得る。これに対し、「非在地」「外来」「搬入」といった単語は、生産の体系が、ある地域（エリア）外であり、多くの場合、単発的に地域内製品に介在する。この過程が、有効的かつ普遍的に認識されるのが、土器の生産の場である。

しかし古墳の横穴式石室は、前に述べたように、在地の結集形態の証のため、その形態差によって、造墓者の選択される埋葬主体部の形態が異なる。これこそ諸段階で共同体的諸関係が、完結された部分なのである。むしろ横穴式石室の構築を形式学的に細分し、在地性や非在地性を工人（技師を含む）の移動によって説明するよりも、横穴式石室を含めた埋葬形態の型を結集形態の型として認識し、分析していくことが有効であろう。

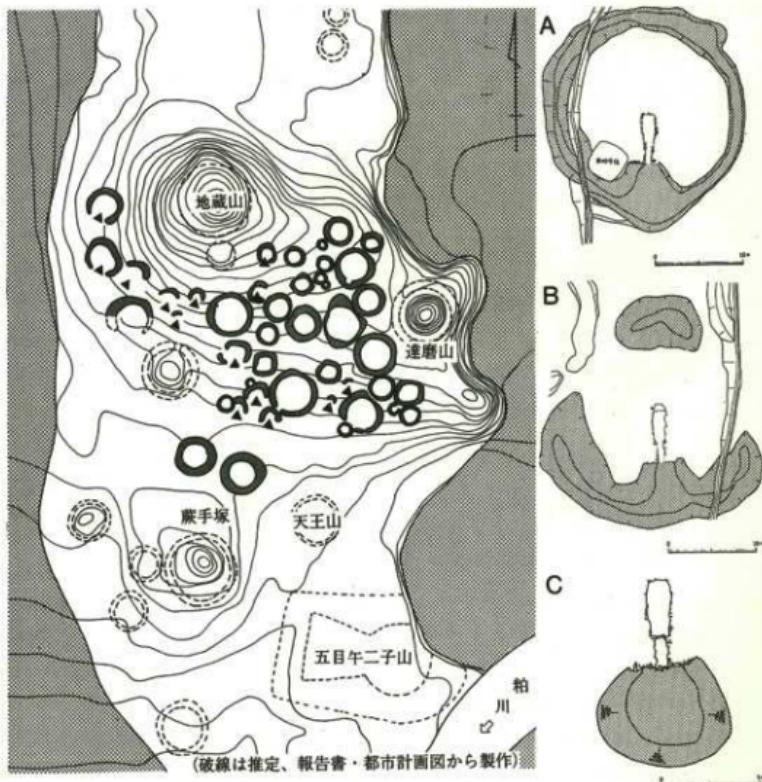
### 第1節 前庭状のピットの分布

赤城山南麓に分布する前庭状ピットをもつ古墳は、西を荒砥川、東を鍋木川（柏川）に挟まれた前橋市・伊勢崎市・赤堀村・柏川村で確認されている。具体的には、前橋市小糸荷遺跡（第2図1・註4）七ヶ石古墳群（2・註5）柳久保遺跡群（3・註6）上繩引古墳群（4・註7）荒砥二之塚古墳群（5・註8）赤堀村地蔵山古墳群（6・註9）下触牛伏遺跡（7・註10）八幡林古墳群（8・註11）今井北原古墳群（9・註12）峰岸山古墳群（10・註13）伊勢崎市原之城遺跡（11・註14）蟹沼東古墳群（12・註15）宮貝戸古墳群（13・註16）柏川村西原古墳群（14・註17）白藤古墳群（15・註18）などである。おそ

らく今後の調査の進展によって、これらの古墳群の周辺部の古墳群でも、数多く確認されていくことだろう。

古墳時代のこの地域の生産体は、赤城山の長い裾野を基盤に展開した。谷頭と細かく入り組んだ開析谷の確保、そして丘陵性台地への果敢な畑作の進行は、濃密な遺跡が物語る(註19)。台地・丘陵上に累々と構築された古墳は、昭和10年の『上毛古墳総覧』(註20)によると、1590基が登載されている。その後の発掘調査や記載漏れを含めると、2000基は下らないであろう。

造墓は、どこの地域でも同じだろうが、空闊地が利用される。集落や耕地を除いた適地に選定され、墓域が形成される。関東地方の場合、6世紀以降に墓域は、苟的出現をみるが、7世紀初頭を境に、墓域が限定されていく。そのため未曾有の群在化を生み、いわゆる群集墳が形成される。6世紀前葉から7世紀前葉の拡散化の傾向は、一方で中小の前方後円墳を含んだ新墓域を形成し、他方で墓域自体が、空間的拡散の方向を進んだ。この新墓域の成立は、7世紀前葉に大型円墳・方墳の





第2図 赤城山南麓の前庭状ピットをもつ古墳と主要前方後円墳の分布

造墓をもって終りし、それ以降、その墓域内に展開が限定された。

この段階の造墓は、きわめて限定された墓域内に、先取特權的に造墓された個々の古墳を侵害することなく造墓された。そこでは、墳丘規模や形態は、さきに造られた古墳を嚴守するため、変形こそしているが、埋葬主体部および前庭部は、最も守られるべき要素であった。そのため個々の墓域全体は、計画的配置を探らない。それは、地蔵山古墳群が良好に示す。この段階に限定すると、その分布は、前段階に設定された墓域の踏襲であり、またその保持であって、多くの場合重複していると考えて良いだろう(註21)。

しかしその造墓主体者である集落と墓域は、短絡的に一对一で結実した場合は、むしろ例外的であろう。

## 第2節 その墳丘の規模と形態

前庭状ピットの古墳は、このように既存の墓域内に構築されるが、造墓エリアの規制から墳丘の規模・形態に制限が加えられた。定型化した方形・円形、あるいはもはや消滅してしまった前方後円形といった墳丘形態を保持することは、不可能であった。ただしその初期的段階では、墓域内にも余裕があり、形態・規模にも定形的な傾向を見ることができる。下触牛伏1号墳は、この古墳群の中では、前庭状ピットをもつ唯一典型的な方墳（一辺25m）である。

しかし下触牛伏1号墳はこの墓域内の初現的な古墳ではない。これ以前にも2~3基程度の造墓があった。それにも増て定型化した造墓の背景には、副葬品（註22）にも見られるこの被葬者の優越性と、独自性をみることができる。その反面墳丘の規模は、他と競合し隔絶的ではない。

しかし荒砥村68号墳は、他と隔絶した墳丘規模をもつ。乾谷沼に面した七ツ石の丘陵斜面に立地する径34mの大型円墳である。玄室前部と羨道部が破壊されているのでやや不明瞭だが、両袖型石室と考えられる。現状では、前庭状ピットをもつ古墳の中では、この古墳のみが大型円墳で、ほかは径15m以下の小古墳と考えられる。

また多くの古墳の調査が、墳丘削平後の周溝の調査に始終しているため、立体的な検討是不可能だが、周溝形態のグルーピングは可能である。地蔵山古墳群の調査の報告で、松村一昭氏は、周溝の掘り方を3形態に分類している（註23）。A類：周溝の完周するもの、B類：周溝の一部とされるもの、C類：周溝のないもの（第1図参照）。報告書では、出土遺物のクロスチェックを通じた年代論的位置付けの検討過程は、取捨されているが、周溝の重複変更の事実から、変化の方向性としてA⇒B⇒Cととらえられるという。この変化を徳江秀夫氏は、荒砥二之塚遺跡の報告で、「一定の区域内に古墳を築造しなければならなかった規制と労力削減とが一致した結果である。」と結論付けられており、まさに的中の矢であろう（註24）。

7世紀中葉以降、墓域規制の潮流の中で、定型化された墳丘形態が、否定されつつも続行していく。その反動は、周溝が、墳丘の採土の目的だけに掘削され、その極限の形態がC類と考えられるのである。そこで問題となるのが、この前庭状ピットの役割である。

ただその機能的側面の追及前に、出土遺物を検討し、構築と埋納のプランクを確認しておく。

## 第3節 構築から土器埋納までの期間

前庭状ピットをもつ古墳の初現は、やはり荒砥村68号墳であろう（註25）。羨道部は破壊されているが、いわゆる巨石巨室墳である。玄室内から7個の耳環が出土しており、少なくとも4体以上の埋葬があったと考えられる。玄室内からは、土器類が出土していないが、前庭部隅から提瓶・平瓶・フラスコ形瓶が出土している。玄室内から土器類を出土した古墳は稀である。地蔵山漏れ1号墳・赤堀村4号墳・5号墳・原之城1号墳・下触牛伏6号墳などが上げられる。

一方前庭状ピット出土の土器は、須恵器の提瓶・フラスコ形瓶・長頸瓶・壺・环身や土師器の环

類がある。またその出土状態は、前庭状ピットの覆土内の同一層内の出土であり、これが一つの古墳の墓前祭祀の終末の形態を示すのであろう。ただしここで与えられる年代(註26)は、埋葬主体部の構築年代とは著しく離れる。それは横穴式石室の変化が、連続性を保持しているのに対し、伴出する土器類の変化の序列が断続的であるためである。

むしろ問題は、前庭状ピットに置かれた土器が、これ以降新しい土器をもって、諸事象を確認する必要性が途絶したことであろう。横穴式石室が初期の段階から追葬を貫徹していたことは、単にその造墓の年代的位置付けを曖昧にしただけではない。造墓が追葬のシステムを媒介として、継続的な墓前祭祀をパターン化し、その都度在地社会の結実を確認したためである。そのため追墓(新墓の造営)の停止は、国家的法的権力による在地社会のもつ共有地を含む私地への介入にあり、前庭状ピットに一括埋納された土器が示す段階に、強力な政治装置の存在をその背後に考えておく必要がある。

#### 第4節 出現とその背景

赤城山南麓で初めて横穴式石室が構築されたのは、前二子古墳である(註27)。細狭な狭道とそれに続く長大な玄室から構成される特徴は、長野県伊那谷の上郷町天神塚古墳や二子塚古墳などから系譜を引き、群馬県の篠瀬二子塚古墳や正円寺古墳・王山古墳と共通する(註28)。

前二子古墳の場合、使用石材が輝石安山岩の壊石のため、比較的巨石の傾向がうかがわれる。しかし後続する巨石巨室墳の系譜とは異なる。荒砥三子古墳は、前二子古墳から中二子古墳、そして後二子古墳へと造墓の展開を追認できる好例である。中二子古墳は、未掘の古墳であるが、後二子古墳が巨石巨室墳であることや、初期横穴式石室の多くが各地とも単発的造墓であり、後続することが少ないとから、巨石巨室墳の初現的形態を埋蔵していると思われる。後二子古墳では、鉤手状把手をもち口縁部も直線的に開くだけの提瓶が出土している。前方後円墳は後二子古墳をもって造墓が停止する(註29)。

その後、巨石巨室墳でしかも大型古墳の造墓は、約1km北西の乾谷沼を臨む七ツ石古墳群へ移動する。この古墳群は、径30~40mクラスの大型円墳3基が調査され、それぎれ巨石巨室墳が確認されている。

荒砥村72号墳は、前庭部は未だ付設されず、袖部の不明瞭な両袖型石室で提瓶が出土している。後二子古墳からそれほど下らない古墳であろう。荒砥村70号墳は、前庭部が付設されるものの、ここでいう前庭状ピットの掘り込みはない。ここから高环や提瓶などが出土している。そして荒砥村68号墳の登場となるのである。

前庭状ピットには、3つの基本的な構成要素がある。

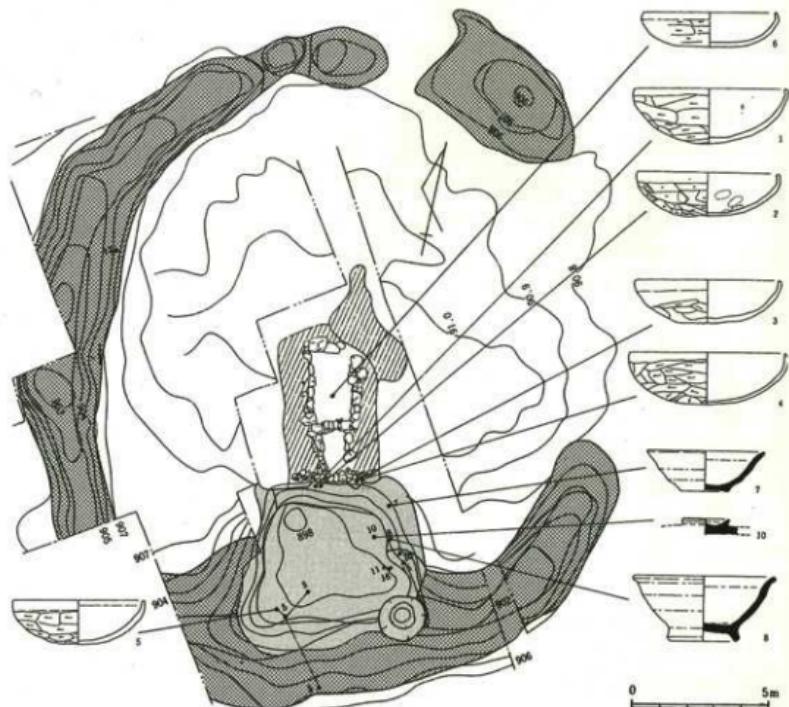
- ① 狹道側に面した部分に、台形状の列石を伴う前庭のある場合もある。その形状は不定形だが、一貫して横穴式石室側に狭く、外側に広い。1m以上の深さをもつ凹地である。
- ② この掘削時期が石室の構築時期、あるいは追葬期等のどの段階に該当するかは不明瞭だが、埋没直前に限定された器種の土器類が供獻されている。それは先に上げた土器類であり、東国的一般的な集落跡からは出土しない稀な土器を含む。

③ さらに前庭状ピットに連続する横穴式石室は、旧地表よりもやや低い位置に掘り方を設定する（半地下式）。とくに輝石安山岩が使用されている。これは山石として、豊富に赤城山南麓の自然残丘陵内に包含されている石材である。

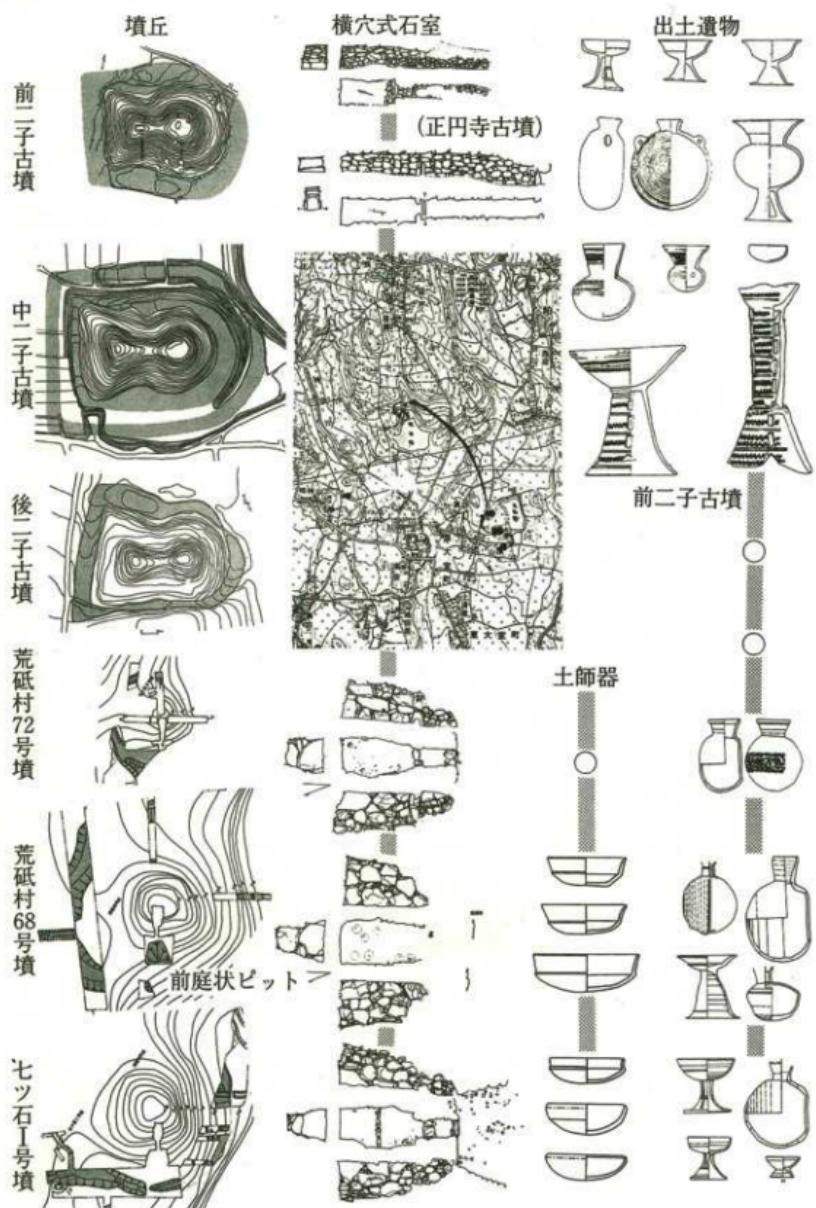
出土遺物をもって横穴式石室の年代を推定する常套手段は、この場合きわめて困難である。一つに7世紀の古墳全般にいえることだが、須恵器を中心とする副葬遺物の出土がきわめて乏しいこと。二つに出土遺物は、前庭状ピットの底面から浮いた状態で出土していること、三つめとして、搬入品が多いと考えられるためである。また東国の須恵器の集中と再分配のシステムを解明してからでなくては、机上の空論となろう。

しかしこの事実は、土器の副葬が、玄室内から前庭部へ移動したことを意味するのではない。この転換は、壺・高壺・壺・器台から壺・平瓶・長頸瓶・フラスコ形瓶などへの器種の交換であった。そして古墳への土器埋納姿勢そのものの変化であったといえる。器種交換は、汎日本的に前形態を払拭した。しかし墓前儀礼の場の設定方法は、地域的に限定された範囲に成立していた。

つまりこれらの土器が、前庭状ピットに置かれた段階は、各古墳の埋葬関係者の停止した段階で



第3図 書上上原之城1号墳遺物出土状態



第4図 赤城山南麓の巨石巨室墳の変遷

ある。それは同時に一方でこの種の土器が、官衙へ集中し、生産の国家的機械化と一個の在地首長層の独立的交通権の否定が行われ、きわめて汎日本的な規制の存在をそこに汲み取ることができる。そのため造墓の時期は、玄室の出土遺物の存在する古墳を定点として、あくまでも造構の変化のなかに推定せざるをえない。それは、①周溝形態の変化②横穴式石室構築面（掘り方）の変化③横穴式石室の技法・形態の変化である。

この変化の方向性は、各古墳群内、あるいは古墳群相互でも連続的であり、土器の非連続性がむしろ強調されるべきであろう。つまり造墓は、地蔵山古墳群では、最も古い赤堀村4号墳・5号墳が、六窓鏡や鉄鏡、あるいはTK43型式併行の須恵器模倣と考えられる、土師器壊などの存在から6世紀末に位置付けられる。しかし前庭状ピットの付設は、さらに遅れ、7世紀第Ⅱ四半期と考えられる。また地蔵山漏れ1号墳は、7世紀中葉に位置付けられる長頸瓶が出土している。さらに前の荒砥村68号墳からは、7世紀第Ⅱ四半期を示す須恵器が出土している。これ以降付設が、普遍化したといえよう。

またその下限は、周溝形態の変化から、全く周溝を付設しないC類の一群の築造に当たるが、その時期を推定する資料は乏しい。麻手刀を出土する古墳（下触牛伏1号墳）や、いくつかの鉄鏡を出土する古墳はあるが、それらは全て8世紀を大きく下るとはいえない。

## 第5節 前庭状ピットの機能的側面

群馬県や埼玉県北部の多くの横穴式石室の前庭部は、玄室や羨道の構築と同時に設計・施工されたと考えられる（註30）。この前庭部施設は、6世紀後半以降の各古墳に付設が確認でき、前庭状ピットの分布する赤城山南麓でも例外ではない。しかし前庭状ピットの付設が開始されて以降も一般的な前庭部施設は、姿を消したものではない。

前庭状ピットの出現に足並みを揃えて、横穴式石室の施工方法も変化した。それは、荒砥村68号墳が如実に物語っている。台地縁辺の傾斜地に墳丘が構築されたため、横穴式石室はコンターラインに平行して構築された。そのため羨道入口が、地表面下となる。これは、一方で横穴式石室が、巨石巨室墳の系譜を引き、構築する必要性とそのための多量の盛り土が必要となったが、それすらも極力制限されていったためであろう。そこには主要な葬送儀礼の場として横穴式石室が、地域に定着したこと、すでに墳丘が、その役割を交代させられつつあった現象を背景としていた。

前庭状ピットの出現の背景には、半地下式構造の横穴式石室の構築の開始と、墓室内空間（墓域）と墳丘外空間（墓前域）の設定の認識が行われていたのであろう。隔絶の認識の表示は、被葬者と葬送者、あるいは葬送者同志の紐帯を強力にし、被葬者を頂点とした下部構造間のある結集形態を類推することができよう。

前庭状ピットの墓前祭祀では、ピット内部から玄室へ続く段階状造構を検出した伊勢崎市蟹沼東68号墳から、単なる祭器具の廻楽の場ではなく、氏族社会を認識する場であった（註31）。

以上、7世紀から8世紀にかけて、赤城山南麓にみられる墓前祭祀を通じた結集形態を検討してきた。その痕跡が、横穴式石室の前庭部に掘られた土壙（前庭状ピット）として発掘される。一方、この造構によって半地下式構造の横穴式石室の掘り方を設定し、他方では、墓前で実施された共通

する行動として、被葬者間に共通認識感（結束）を強調させた。これは、横穴式石室の「地域性」という一片の言葉で片付けられない。地域があつて結束が存在したのではなくて、他の近接する集団との均衡を保持していくため、こうした結集が必要となつたのである。

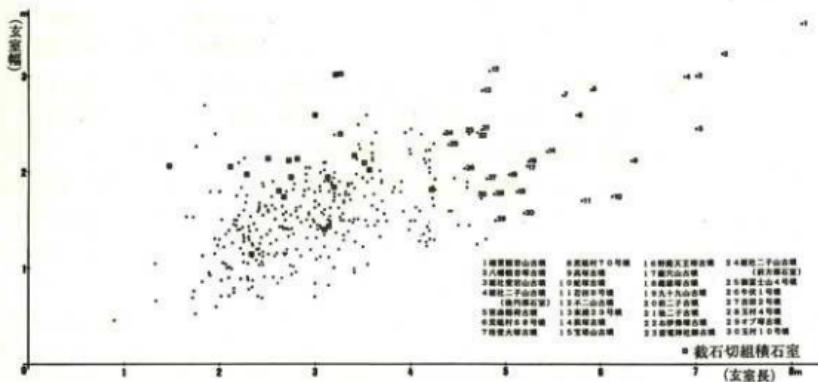
## 第2章 在地首長層の墳墓と巨石巨室墳—上毛野・武藏の後・終末期古墳の展開—

前庭状ピットの出現の契機となった巨石巨室墳の形成・発展過程を次に検討することで、前庭状ピットを紐帶とした集団より一段階上部の構造体の動向を考えておきたい。それは巨石巨室墳が、前方後円墳のみに構築され、その被葬者層の独占的特権であった段階から、下部の構造体に順化していく過程の踏み返しでもある。

巨石の使用や石材の組み合わせで、横穴式石室の大形化は進んだ。すでに前二子古墳の天井石や奥壁が、一枚石で構成されており、巨石使用的萌芽がある。これは扁平な川原石で全壁面を構築していた篠瀬二子塚古墳や、西日本の初期横穴式石室のように割れ石をレンガ状に積み上げる系列とは、違う系列である。大形石材は、まず天井石に、次に奥壁に、そして側壁へと使用頻度が増加した。石を運ぶ技術（修羅や滑車・ろくろなどの組み合わせ等）と石を積み上げる技術（横穴式石室構築の工法）は、不可分の表裏一体的の発展の軌跡をたどる。

また巨石墳への傾向は、横穴式石室が出現当初から持っていた複数埋葬の観念（註32）と、増加した家形石棺に代表される郴内棺の副次的埋納化が、巨大な空間を必要としていたためである。それは取りも直さず横穴式石室が、玄室・羨道を問わず血縁的紐帶の確認の場であったからである。

そのため巨石巨室墳（註33）の構築は、交通を掌握する上部構造の首長層に限定されていた。そこで巨石巨室墳のタイプを分析することによって、6世紀後半から7世紀の首長層の結集形態の一部が把握されよう。それは首長層の結集の範囲・状態を把握することにつながるのである。



第5図 群馬県内の横穴式石室の玄室規模と30の巨石巨室墳



第6図 上毛野・北武藏の後期前方後円墳（番号1～69は編年表:第58・59図と一致）

### 第1節 6世紀の巨石巨室墳

川原石積みの狭長な横穴式石室の最終段階から、上毛野地域の首長層は巨石巨室墳を指向する。各古墳群内相互の前後関係や埴輪から、巨石巨室墳の萌芽的な古墳は類推できるが、その実態の把握は困難である。ちなみにこの段階の古墳を列挙すると、藤岡市白石七興山古墳(註34)前橋市達見山古墳(註35)中二子古墳・伊勢崎市蛇坂古墳(註36)などである。ただ各古墳とも埋葬主体部が明瞭ではなく、出土遺物も不明なため細かな分析はできないが、その傾向は探れるであろう。

巨石積み石室の第1段階は、定型化した形態ではなく、それぞれ巨石使用の方向性のみの段階と考えて差し支えないだろう。この傾向は、上部構造の墳墓である大形前方後円墳のみならず、大形の円墳や小形の前方後円墳の埋葬主体部の石材の広域的な移動が小さく、近隣に豊富に産出する火山岩系の石材が使用された。平面形態は定型化していないが、袖無形を一般とする。しかし前橋市伊勢山古墳や柏川村鏡手塚古墳などの片袖形石室や、棟東村高塚古墳など両袖形石室も既に出現している。

本格的な巨石巨室墳は、大形横穴式石室構築への潮流の中で、畿内からの新たな工法も将来してからである。しかし、畿内の大型石室の系譜である芝山式・勝福寺式・二塚式・天王山式・石舞台式・岩屋山式(註37)の規制を受けず、上毛野・武藏の巨石巨室墳は、独自の変化の方向性をとり、巨石の運搬技術や加工技術に関係した技法（技工・技巧的要素）のみを吸収したにすぎない。つまり平面プランや立体プランは、共通する部分が少なく、そこに在地の結集形態の反映する部分があ

ると考えてよいであろう。

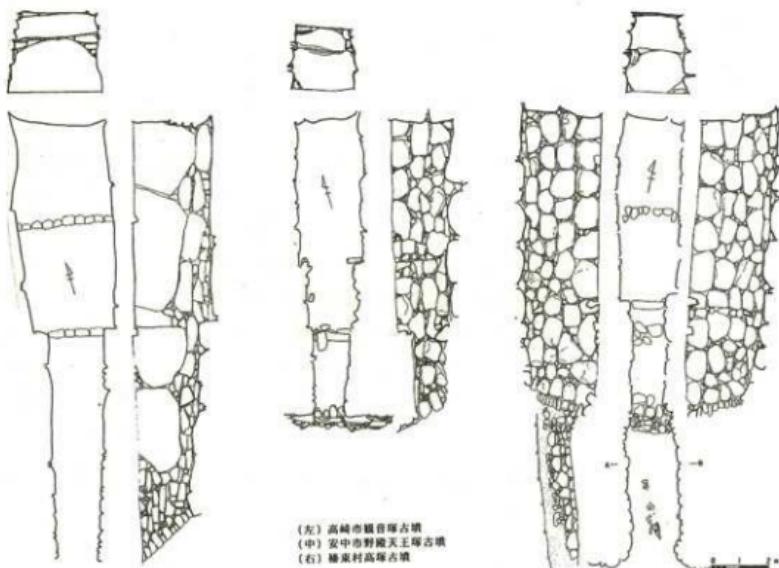
上毛野と武藏では、大形石材の供給形態に大きな差がある。

まず上毛野から事例をみていきたい。上毛野では、八つの異なる供給体系がある。基本的には、水量の豊富な大形河川の上流に石材を求める三形態（碓井川上流・鍋川上流・利根川流域から産出する石材）、自然残丘内の大形壊石を石材とする三形態（赤城山南麓・榛名山東麓・戸塚丘陵）、河川の中流産出の川原石を集積する形態（鮎川・神流川流域）及び凝灰岩を採取する形態（観音山丘陵周辺）である。

このことは、石材の供給を通して小地域内で連合的状態が、形成されていたことを示唆する。遅くとも大形石材が、各古墳で使用されるようになった6世紀後半から、この結集は始まり、7世紀初頭までは、変形しつつも継続していたと考えられる。石材が同一の供給地からもたらされたことは、各共同体の結節点として、河川や岩露頭などを媒体とした労働の結集を予想させる。すなわち、同じ石材の採集地を共有する古墳間には、採集地を媒体とする連合形態が存在したと見なすべきであろう。それは、石材の搬入出の工法、石材の架構技法、さらに施工方法までも共通させた。個々の集団の結集が、水田や畑などの計画的水利による耕作を通じ磨かれていった段階を越え、消費材（註38）の移動を通して熟成されていく姿に投影されるからである。

#### 【碓井川流域産安山岩使用石室】

高崎市八幡觀音塚古墳は、東国で空間容積最大の横穴式石室であり、輝石安山岩の巨石が使用さ



第7図 上毛野の巨石巨室墳！

れている。玄室中央部には、角閃石安山岩の間仕切石と樋石が付設されている。羨道のやや奥まったところに樋石があり、やや古い様相を残す。その終末の段階であろう(註39)。しかし羨道部と玄室の天井は、高低差が見え始め、後続する野殿天王塚古墳で顕在化する前室部的空间への萌芽である。

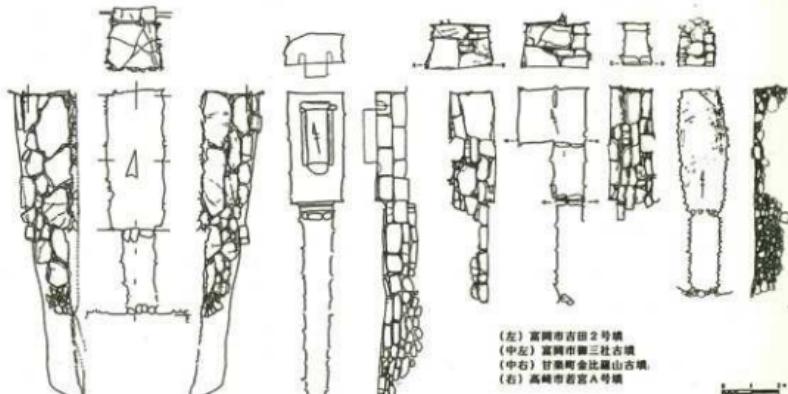
石室側壁面に、 $3.5m \times 2.0m$ 程度の壁石を設置する。しかも $2.0m \times 2.0m$ 大の石材が、10個側壁材として使用される古墳は、他に類例が無く、まさに巨石墳である。むしろ觀音塚古墳の大形石材は異質であって、材地の横穴式石室の中で語ることは困難である。これだけの大形石材を探集し、運搬するのに必要な諸技術は、畿内や畿内を経由した北九州・半島の諸技術を導入してこそ考えられよう。石材を掘り出す小道具(テコやクサビ)運搬する修羅や船、コロ、さらにロクロや滑車も使用されたと考えるべきであろう。畿内でこれらが熟成されたのは、家形石棺をいかにして運ぶかが問題であったからである。

石材の產出地は、碓井川の上流の松井田付近であろう。碓井川流域は、広範囲な沃野に乏しく、水田としては土地生産性の低い地域である。しかし代替的な畑作や、良好な粘土を利用しての須恵器の生産(秋間窯跡群)が活発で、これらの在地首長層への献納が考えられる。そして何よりも科野、東海、畿内へ続く東国の大門である碓井峠を介した交通権を掌握し、文物を集中し再分配していたのであろう。

#### 【鎌川產石材使用石室】

碓井川の八幡觀音塚古墳と対比される鎌川の甘楽町笠森稻荷古墳は、牛臥山に產出する砂岩系の石材を使用した大形石室である。正確な実測図がないために検討は難しいが、樋石を設置する巨石積み石室である。出土遺物は散逸してしまって現在は、残された文書(スケッチあり)が頼りである。それには鉤状把手の提瓶や金環が記載されているに過ぎない。

笠森稻荷古墳に前後する古墳は、西隣する善慶寺・笠森古墳群にある。例えば、金比羅山古墳はL字形の片袖型石室であり、横穴式系石室といわれている神明塚古墳と共に笠森稻荷古墳に先行す



第8図 上毛野の巨石巨室墳2

るであろう。全長100mの笠森稻荷古墳が、この段階に突発的に出現したのではない。

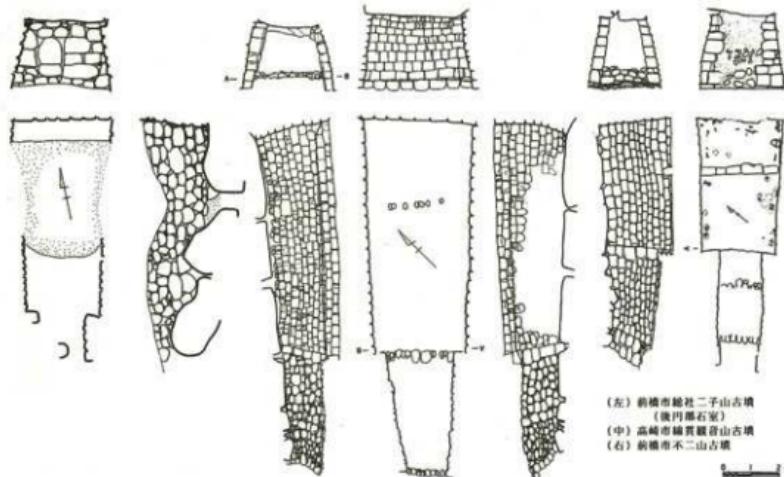
しかし碓井川流域同様、水稻耕作の生産性の低いこの谷が、しかも碓井川よりも集中的に集落や墳墓が累々と構築された背景には、内山峠を介した科野との交通を考えねばならない。それは土師器生産の集中と分与の過程のなかにも明瞭に見られる（第11図参照）。すなわち笠森稻荷古墳の構築段階に、科野系の黒色土器が流入し、在地の土器組成の一端を担うようになる。それは富岡市本宿郷土遺跡や吉井町東吹上遺跡・入野遺跡などで確認できる。甘楽の谷が土器の再分配の範囲であったことは、石材の流通上も牛臥砂岩を共通媒体としている。両者の掌握者こそ、この谷を代表する者であった。

#### 【利根川産角閃石安山岩使用石室】

利根川を経由した石材を使用した巨石巨室墳は、角閃石安山岩の巨石の使用以降に限定できる。それ以前は、前橋市王山古墳や朝倉II号墳など安山岩系の川原石を積んだ初期横穴式石室である。

角閃石安山岩使用もその使用開始直後は、尾崎喜左雄博士が指摘された（註40）ように、川原石を無加工のまま使用していたが、徐々に加工度を増したことは予想できる。前橋市総社二子山古墳や塩原塚古墳、あるいは伊勢崎市古城古墳などがまず築かれ、続いて定型化したブロック状の石材として利用した高崎市綿貫観音山古墳や前橋市不二山古墳、あるいは金冠塚古墳などが構築された。この加工石材の問題は、先に検討しているので省くが、総社二子山古墳や綿貫観音山古墳を玄室平面規模最大とし、両者は発展的系譜としてとらえられる。

関東地方最大の沖積地に大規模に展開されたであろう耕地は、微高地に載る集落を支え、その在地首長層は、総括的首長として他の首長とは経済的基盤の上で優位にあった。しかしカリスマ的単一的な首長ではなく、榛名山ニツ岳爆裂以降、復興に尽力し、大規模な灌漑と集中的労働投下を指



第9図 上毛野の巨石巨室墳 3

揮した人物であろう。さらに彼らは、半島の製品を自らの副葬品として多量に保持することができた。それは彼らが少なくとも、東アジアに及ぶ交通関係の一部を代表していたためであろう。

また後述するが、小形の角閃石安山岩は、利根川から直接採集されたであろうが、總貫觀音山古墳や金冠塚古墳などの大形石材の近距離調達は困難である。大形石材はいずれにせよ、高崎市岩鼻付近にみられる二ツ岳爆裂後の泥流中や、利根川上流の渋川市付近から運搬しなくてはならない。おそらく石材の採取には、採取特権が存在していたと考えられる。その掌握は、この石材を使用する連合体に委ねられ、それを管理したのは、大形古墳を築いた首長層であった。石材の管理こそ新しい首長の重要な仕事の一つだったのである。

この角閃石安山岩が、さらに下流の埼玉古墳群周辺の大形古墳へ搬出されるのは後述する。

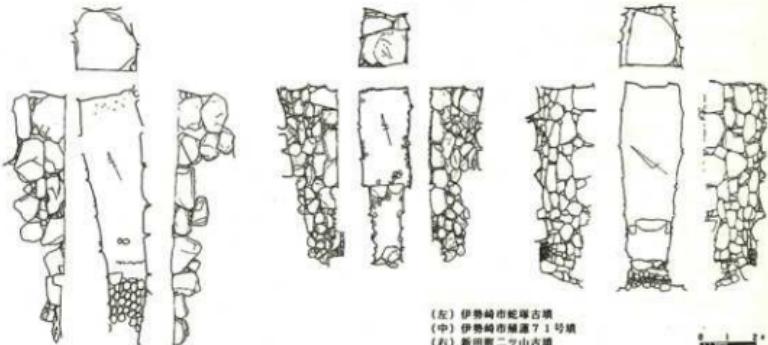
#### 【赤城山南麓泥流層中輝石安山岩使用石室】

赤城山南麓の巨石巨室墳は、山麓の泥流層中ないしは開析谷の露頭に存在する自然石（塊石）を巧みに組み合わせ構築している。硬質の輝石安山岩であるこの石材は、赤城山麓の開析台地の発展した地域では不变的に存在する。横穴式石室が、爆発的に発展する素地（石材の確保・原材の供給）は、保証されていたと考えてよい。

定型化した巨石巨室墳は、大形前方後円墳にみられる。それは、前橋市後二子古墳や赤堀村五目牛二子山古墳(註41)境町上源名双子山古墳である。平面プランや巨石巨室墳の傾向は共通し、多くの形象埴輪を伴う埴輪群が確認されている。

ただこれらの大形古墳の築造年代を推定する資料は乏しく、わずかに後二子古墳から提瓶が出土していることや、伊勢崎市殖蓮村71号墳から甕・高杯・提瓶が出土しているにすぎない。

巨石巨室墳への変化は、幅の狭い羨道部から羨道部の二倍はある玄室幅のプランを構成する袖無型石室（蛇塚古墳）から、より大きな空間を構成できる両袖型石室への発展である。また立面プランも羨道部と玄室部が、ほぼ等しかった段階から、玄門を境に羨道部天井高が低くなる。つまり玄室内空間よりも、羨道部空間を広く表現する。赤城山南麓の巨石巨室墳は、両袖型石室を指向する発展形態をとる(註42)のである。



第10図 上毛野の巨石巨室墳 4

### 【高塚・金山丘陵産石材使用石室】

太田市北部の定型化した巨石巨室墳は、新田町二ツ山1号墳である。奥壁からやや羨道部に最大幅をもつ袖無型石室で、天井石は奥壁側から次第に羨道部にかけて低くなる。円筒埴輪列によって横穴式石室の前の部分に、前庭状の空間を創出している。同様の例が、様東村高塚古墳で検出されている。玄室床面よりも羨道部床面が、高く構成されている。埴輪は、低位置凸帯をもち、断面台形の凸帯である(註43)。形象埴輪は、56体以上確認されている。県内例では最多に近い。圭頭太刀や双龍の環頭太刀が出土している。また素環鏡板付骨や貝製雲珠・心葉形杏葉・銅鈴・鎧鉢金具など良好な馬具のセットが出土している。これらは、6世紀後葉の様相を示すが、新しい様相のフラスコ形提瓶などもある。

二ツ山1号墳が、二重の円筒埴輪と形象埴輪群を施設した幅広の第一段と、幅20mの周溝を設定したため、二ツ山2号墳の周溝形態に大きな無理が強いられた。確かに2号墳の埋葬主体部が、不鮮明なため追証は難しいが、『上毛古墳総覧』によれば、「幅四尺、高三尺、奥行二一尺」の横穴式石室が開口していたことがわかる。

### 【觀音山丘陵等產出凝灰岩使用石室】

高崎市から藤岡市北部にかけては、在地産の巨大な石材がなく、巨室墳を指向するには、二つの方法しかなかった。一つは、小振りの擂粉木状の川原石と土糞大の川原石を、複雑なモザイクにした模様積みとする工法であり、一つは、觀音山丘陵等から産出する凝灰岩を切り出して用材として使用する切石積みの工法であった。大形石材を何らかの方法で上流部から輸送する労費に比べれば、石材を探掘するか、模様積み工法を鍛えることが遙かに懸命であったのだろう。

凝灰岩が注目されたのは、觀音山丘陵が良好な凝灰岩を豊富に産出していたこと(舟形石棺の生産)と、綿貫觀音山古墳や総社二子山古墳などが、ブロック状部材を指向しつつあったことによる。高崎市下佐野町漆山古墳は、60m級の前方後円墳で、凝灰岩を使用した石室の中には、頭椎太刀等が副葬されていたらしい。

また高崎市石原稻荷山古墳も一説に前方後円墳といわれ、凝灰岩の加工石材が使用されている。

牛臥砂岩使用の東端に当たる藤岡市諏訪神社古墳群では、継続的に前方後円墳から円墳へ3基造営されている。6世紀第IV四半期の牛臥砂岩の流通は、鏑川流域の前方後円墳(富岡市御三社古墳・藤岡市諏訪神社1号墳)や円墳(富岡市富岡5号墳)の埋葬主体部に共通して使用された。この段階に藤岡市白石古墳群の首長墓の系列が七興山古墳構築以降、急速に墳丘規模を縮小化させた段階にあたり、反面富岡市側で笠森稻荷古墳が浮上してくる。

牛臥砂岩は甘樂谷沿いの在地首長層の結束を強めるべく、前方後円墳へ供給されたのである。そこには、総社二子山古墳から觀音山古墳へと、規格化していく角閃石安山岩の石材の需要の増加が、牛臥砂岩のブロック状石材化を生んだ。つまり材種の共通性よりも、擬似的な加工の共通への方向を選んだのである。それは、利根川一角閃石安山岩ルート、甘樂川一牛臥砂岩ルート、觀音山丘陵一凝灰岩ルートが、横穴式石室の壁面構成を共通化させたためである。

石材の供給が、共同所有の產出地と被葬者層の管理権の上に成立し、加工技法の共通性に工人の移動と、構築現場での加工を考えることができる。これによって錯綜する工人間の連絡は、上部構



第11図 上毛野西部の大形古墳の石材供給ネットワーク

造の結集形態を代替する指標となったのである。

なお石材を直方体に加工し、壁面を構成する技術は、半島では、とくに高句麗にみられる。

#### 【川原石模様積み巨室墳】

模様積み石室は、小形の石材しか供給できなかった鰯川・鍋川・神流川・小山川・烏川などの藤岡市から児玉郡にかけての地域に分布している。この地域では、模様積み石室が出現するや、広い埋葬空間を欲した墳墓に急速に導入される。藤岡市の戸塚神社古墳は、全長50mの前方後円墳で、後円部に開口する横穴式石室は、側壁中段で乱石積みから模様積みへ架構方法を変更する。二種の壁体工法を駆使した古墳である。

また美里町一本松古墳や児玉町庚申塚古墳、藤岡市の御伊勢塚古墳・平地神社古墳・靈符殿神社古墳などの大形古墳に典型的な姿が見られる。御伊勢塚古墳は、昭和62年度の調査で、埴輪をもち墳丘にいくつかのコーナーをもつことが確認されている。このコーナーは、墳丘造築の作業分割の痕跡であり、八角墳とされる熊谷市籠原古墳群の場合も同様であろう。径20mの円墳である。一本松古墳は、径30m弱の円墳で、横穴式石室が良く残っていた。また周溝中からは、円筒埴輪や叔形埴輪が出土している。

児玉地方と藤岡地方の模様積み石室の出現は、6世紀後葉でとらえられる。しかも大形円墳から出現していることは、大形前方後円墳にみられる大形石材の供給と、それを駆使した技術的相互連関の体制の中に編成されなかったか、あるいは別の自律的な構築技法の獲得に成功した台頭しつつある新首長層を想定できる。

無論、神流川をダブルボーダーとして、模様積み石室の様相は一変する。温和で柔らかい雰囲気

の空間を構成する藤岡地方と、頑健な固い雰囲気の空間の児玉地方の模様積み石室の違いは、親材として使用されている大振りの石材の相違である。それは藤岡地方が、親材に丸味のある川原石を使用しているのに、児玉地方の場合は、片岩系の角礫が使用されているためである。

また壁体の構成が、児玉地方の場合は、親材と子材が壁面を揃え、親材の面より子材の面が出ないように石材を嵌ませている。これに対し、藤岡地方の場合は、親材の丸みのある川原石を使用することもあり、子材の頭が、親材の面より突出し構築されている（志村哲氏御教示）。

壁面の石材の取り扱いの相違は、構築工法の相違を連関させる。また模様積み石室が、胴張り型石室と不可分の関係であることは自明の理である。石室荷重と盛土荷重を横穴式石室の個々の部材が、吸収伝達するそれまでの工法では、空間構成に限界がある。しかしそれで大きな空間を必要とした場合、①石材を大型化するか、②個々の石材の圧着を密にするか、③壁体自体をドーム化し、個々の部材に掛る荷重を拡散して、偏心荷重を最大限抑制する必要がある。胴張型石室の構築が、巨室墳から始まった背景は、まさにここにある。

巨室から規模の縮小化は、工法の完成形態が整っていれば決して難しいことではない。むしろその工法の掌握・管理こそが、巨室墳の構築者層の保持し続けた権利なのであり、その獲得は、巨室墳の構築指導者との対応の中で考えられよう。

以上、上毛野の6世紀代の巨石巨室墳を概観した。初期横穴式石室から漸移的に巨石巨室墳が、出発したのでなかった。全国的規模で席捲した横穴式石室の巨室化の現象と、地域内の葬送儀礼を通じた結集形態の模索が、在地内に産出する石材の確保・確得からそのバラエティー化を生み、巨石巨室墳への胎動が始まった。石材採集権の掌握、搬出のための水利の確保、造墓現場での施工監督者の獲得と、基本的労働の提供者の確保が、次期首長に課せられた責務であった。

上毛野では、石材の獲得方法を通じ、八つの形態が存在したことがわかった。これはさらにいくつかに分類できる。

①壊石系石材使用石室は、最も巨大な石材が得られる。山がちな地形や、河川の上流から搬出しなくてはならない。しかしその採取範囲は、在地首長層の在地内諸関係の完結する範囲を著しく逸脱していない。「在地内山石」

②角閃石安山岩等は、渋川市付近まで遡らないと、巨石を確保することは難しいが、個々の石材を部分加工することによって、巨室を構成することが可能となる。旧利根川の流路沿いや、榛名山泥流層中にみられる角閃石安山岩が使用された。「在地内転石加工石」

③觀音山丘陵や牛臥山から凝灰岩や砂岩を切出し、あるいは落石を加工することによって巨室墳を形成する。「軟質岩層切出し石」

④大小の川原石を巧みに組み合わせて、大きな空間を構成する。この方法は、下部構造へと浸透するが、地域的拡散の方向は取らなかった。「模様積み用片岩」

この四形態の発展の背景には、石材の所有をめぐって、互いの在地首長層間に不可侵の了解があり、石材の獲得に困難な地域では、積み方の工夫や、軟質岩盤から石材が切出されていた。さらに積み方の技法や、加工石材の露頭も互いに不可侵の了解があり、それは、上部構造の結集を強く表現していた。

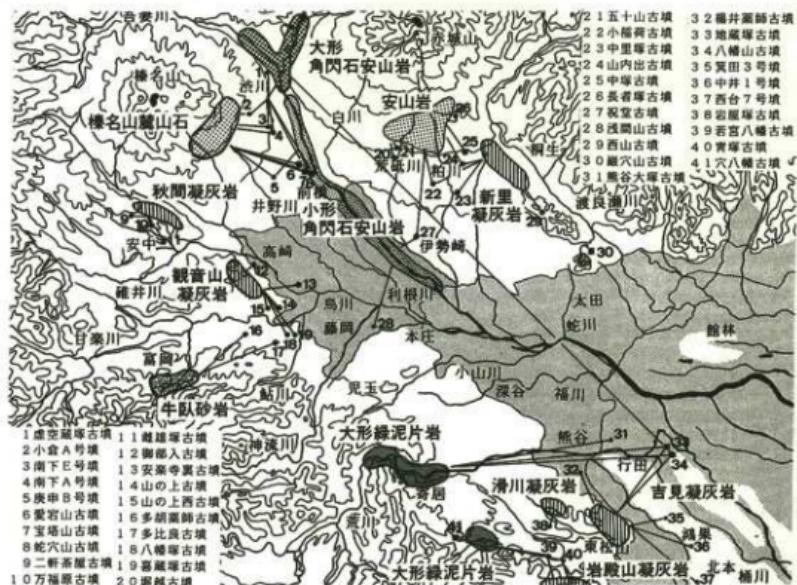
前方後円墳・大形円墳の埋葬主体部は、巨石巨室墳に限られた。巨室化の動きは、新たな施工法と石材の開発が進められ、そこに大形前方後円墳の築造層と台頭してきた新興首長層との間に、新たな結集をみるのである。そして前方後円墳の築造停止とともに、巨石巨室墳の築造の方向性にも変化が訪れるのである。

## 第2節 転換する巨石巨室墳

古墳時代の上部構造の結束の形式は、前方後円墳をもってその存在を単に確認し得た。大形円墳・方墳へ転換していく上部構造の墳丘形式の転換は、古墳時代後期から終末期へのメルク・マールの一つである。上部構造の結集の指向が、方墳・円墳へ転換した初期的段階、すなわち7世紀前葉にみられる埋葬主体部の変化も、汎日本的な結集形態の変化といえる。

典型的に前方後円墳から方墳へ移行する前橋市総社古墳群では、埋葬主体部が、総社二子山古墳後円部石室から愛宕山古墳へ、平面・立面形態に系譜関係をもつ。さらに内蔵する家形石棺は、元来その系譜が、上毛野の在地内には存在せず、畿内、あるいは濃尾地方から系譜を引く工人によって造作されたと考えてよい。天井石・側壁材の輝石安山岩は榛名山麓から、石棺材の凝灰岩は観音山丘陵から調達したと考えられる。

前述のように、異種石材の一古墳への集中の形態は、各石材を管理する各構造体間の交通を掌握



第12図 上毛野・北武藏の終末期古墳と石材供給ネットワーク

する首長層に限られる。あるいは、彼らを通じて再分配された結果である。

総社古墳群における角閃石安山岩の使用から輝石安山岩・角閃石安山岩の混合による横穴式石室への転換は、この段階に強力に方墳を紐帶として成立していく、汎日本の上部構造の結集形態を反映している。家形石棺は、畿内を中心に筑紫・出雲・吉備・播磨・美濃・伊豆で需要があり、彼らは地方工人を移動させ、プランテーション的な生産を指導した。

7世紀前葉に方墳として成立した上毛野の古墳は少ない。僅かに赤堀村39号墳（一辺17m）や太田市巣穴山古墳（一辺30m）、下触牛伏1号墳（一辺18m）をあげ得るにすぎない。むしろこの段階では、かつて前方後円墳を造墓した地での連続的な造墓ではなく、台頭する新在地首長層を含め、各共同体が再編成されていったためと考えられる。

つまり7世紀前葉の段階の在地首長層は、方墳に結集する形態と、円墳に結集する形態が併存していた。必ずしも前者が後者よりも優位に立つのではなく、畿内の造墓の方向性に連動した上部構造の紐帶の反映とみれば良いであろう。この段階、上毛野の方墳に指向する古墳は、輝石安山岩のような硬質の割石を用いて、壁面を構成し広い空間を求めた。

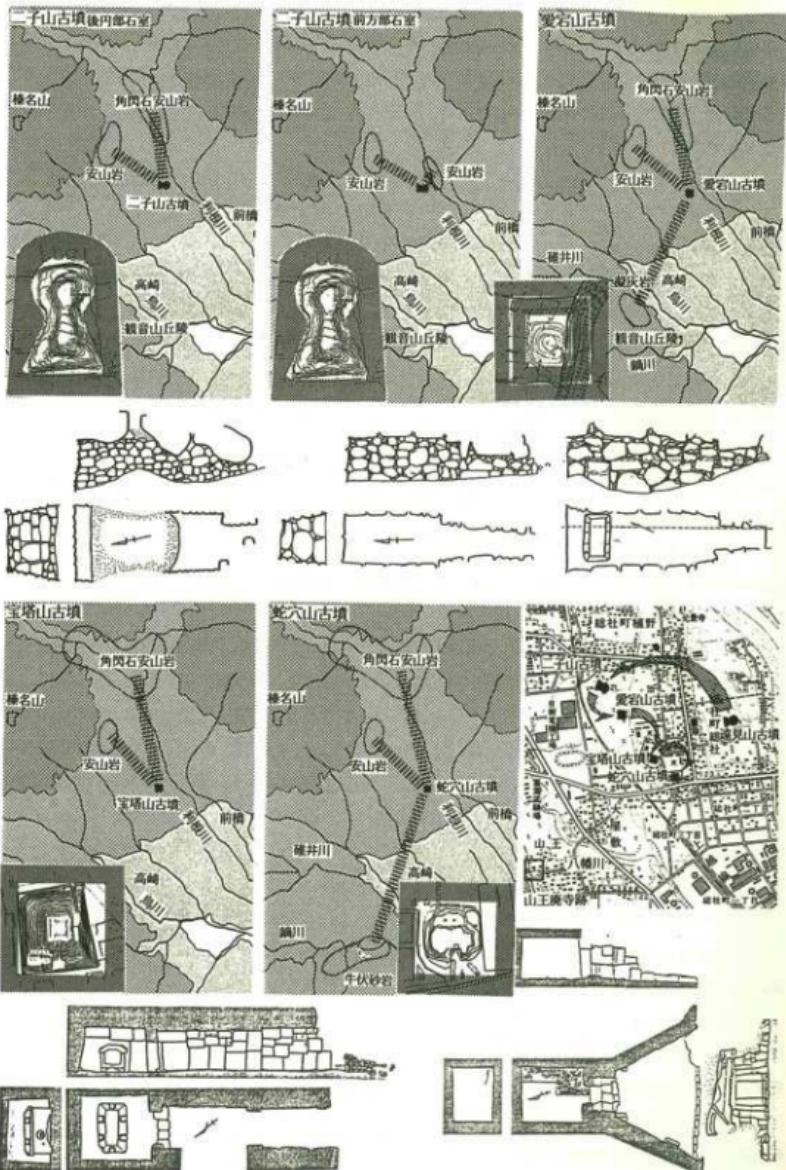
前方後円墳から大形円墳に結集する在地首長層が、圧倒的である。上部構造を構成するこの時期の円墳は、前述の4タイプを基本的には踏襲する。壊石系の巨石巨室墳は、吉岡村南下B号墳・群馬町金子愛宕塚古墳・前橋市荒砥村72号墳・安中市磯貝塚古墳などがある。巨石積みの傾向は残るが、玄門構造や玄室と羨道の天井部に、高低差をつける新しい要素が加わってくる。しかし前方後円墳の墓域に隣接し、大形円墳が構築されたのは、七ツ石古墳群の荒砥村72号墳のみである。

角閃石安山岩使用古墳は、さらに顕著である。しかしその実態は不明瞭である。それは、角閃石安山岩を多量にしかも確実に使用していたであろう前橋市広瀬古墳群が、団地造成のため壊滅してしまった今日では、その発展的系譜や技法の変化等が、全く解明できないためである。しかし痕跡程度に残る資料は、山王大塚古墳やポンポン塚古墳、鎧塚古墳などの20m以上の大形円墳を提示することができる。

その中で伊勢崎市祝堂古墳は、径20mの二重周溝をもつ円墳として特記すべきであろう。昭和30～40年代の調査が、埋葬主体部に終始し、周溝の確認は不鮮明であった。二重周溝をもつ円墳が、7世紀前葉に成立したことは、方墳以外に上部構造結集の軸が、東国でも確実に存在していたことを裏付ける資料となろう。

さて角閃石安山岩は、前にも記した（註45）ので詳細は省くが、榛名山東麓から利根川沿いに採取でき、7世紀前葉の古墳の共通した主要石材として需要があった。ただし加工を伴う角閃石安山岩の使用される場合は、群集墳内でも主要古墳に限られていた。庚申B号墳や小倉A号墳などである。これらの古墳の出現のパターンは、群集墳の初期的な段階に出現するタイプ、発展途上に出現するタイプ、造墓終末期に出現するタイプ等がある。このバラエティーは造墓者のプロフィール的一面を示している。しかしここで問題となるのは、いかに上部構造が編成されて行くかを追求することであって、それにとらわれることなく、全体としての変化の方向性をとらえることにある。

むしろ旧利根川右岸沿いの前橋市朝倉古墳群や、山王古墳群・伊勢崎市稻荷町古墳群と、榛名山麓の吉岡村小倉古墳群・南下古墳群や群馬町庚申古墳群などでは、角閃石安山岩の使用頻度が極端に



第13図 総社古墳群にみられる石材の供給関係

異なる。利根川右岸に結集した集団は、広大で肥沃な前橋台地に、大規模な計画的水田を開拓した開発主であったのである。

前記のような事情の下では、角閃石安山岩を好んで使用した集団と、輝石安山岩に固執する集団がある。また石室構築に必要な石材は、そのため首長層の管理下に置かれ、造墓者達の共通する所有物として存在したと考えられる。石材すらも再分配の一つであったのである。必要な石材は無尽蔵にあったわけではない。規格化された横穴式石室は、石材の選別を余儀なくされた。

6世紀後葉から來にかけて各地で前方後円墳が爆発的に造墓され、急速に構築がトップする。後続する次世代の前方後円墳に対応した円墳・方墳は、先代からの系譜を引かない（その中で総社古墳群の存在は特筆できよう）。それは大形方・円墳の造墓数が、前方後円墳の造墓数を遙かに下回り、立地も異なり、同一古墳群の概念で捕えることは難しい。おそらくこの時点で、上部構造内部に大きな葛藤が生じ、先代の結集形態を保持しえなくなったためであろう。

そのプロセスを考えるためにには、もはや一国造墳内の検討では不十分であり、汎日本的な視座の上で、上部構造の交通関係と、さらに台頭する下部構造の絶え間ない階級闘争を理解しなくてはならない。そのプロローグとして、上毛野の終末期古墳(註45)を考えておきたい。

上毛野の終末期古墳の特徴は、一般的な群集墳レベルの古墳とは、隔絶した意匠をもつ横穴式石室の構築にある。その一類型が、いわゆる截石切組積み石室(註46)と呼ばれる一群である。すでにこの一群は、6世紀後葉にその萌芽がみられ、全てが7世紀後半まで下る可能性はない。問題は7世紀前葉から後葉にかけて、継続して加工石材を使用する石室が、上部構造の限られた墳墓のみにみられることである。

赤城山南麓では、七ツ石古墳群の後を受け、前橋市小糸荷古墳が築かれた。同じころ新里村山内出古墳も築かれる。両者は、安山岩系の加工石材を3~4段積み上げる共通した技法である。各石材は、部材に合せ細部を部材加工し仕上げる。吉岡村南下A・E号墳も同様の技法である。これはおそらく藤岡市諏訪神社1号墳(凝灰岩)などから系譜を引くと考えられる。また山内出古墳では、新里村付近で産出した凝灰岩が使用されていた。

平面・立面プランや石材の加工度あるいは積み方の共通性は、安中市二軒茶屋古墳と大胡町堀越古墳の間に指摘できる。硬質石材の加工は、両者に不可分の関係をもたらしたことが推測される。さらに新里村中塚古墳の玄門構造は、松本分類のC類に当たり(註47)、同例が東国では、上毛野内にしかみられず、河内飛鳥・觀音塚古墳との類似関係がみられる。つまりC類玄門は、嵌め込み式木製扉木枠造の玄門の存在を示し、赤堀村中里塚古墳・吉井町多比良古墳・多胡薬師古墳・渋川市虚空藏塚古墳・山内出古墳に確認できる。

畿内と比較すると、時期的にも下るが、觀音塚古墳の構築以降に河内飛鳥では、横口式石槨へ移行する。対象的に東国で発展するのは、嵌め込み式木製扉を指向する首長層が、河内飛鳥の工人を将来させたことに他ならない。

一元的な再分配、つまり国造から下層集団へ、一方的な下賜を考えるだけでは理解できず、むしろ上部構造自体が、波状的な交換を成立させていたのである。在地の共同体的諸関係を完結させることと同様、それは上部構造にとって、重大な課題なのであった。一方、前方後円墳から継続的に方

墳が造墓され、総社古墳群では、さらに宝塔山古墳・蛇穴山古墳の二基が築かれた。この二基は、石材加工技術が、前橋市山王庵寺根巻石・塔礎石・石製鶴尾、吉井町多胡薬師古墳・多比良古墳と共にすることが、尾崎博士以来久しく指摘されている。水磨き技法は、古代寺院の礎石を仕上げる段階で生れてきた。蛇穴山古墳に牛伏砂岩が使用されており、鏑川を通じた石室石材の供給が確認できた。貢納の一形態であろうか。

宝塔山古墳の家形石棺が、大和型掘抜式家形石棺に類似し、その系譜を引くと思われる。大和型家形石棺は、「大和型は、国家統制によって製作・流布された公的な石棺と考える」(註48)と藤井利章氏がいわれる様に、「上位氏族」のみに採用された石棺であろう。東国においてこれ以上の作品は見られず、明らかに畿内の上位集団と対等ないしは、それを構成した人物が被葬者と考えられるのである。また壁面に漆喰を塗布する思考も、上毛野内ではかつてなかった。しかも壁面全体に塗布されており、この手法は畿内では、7世紀後半以降に出現する(註49)。

蛇穴山古墳の石室は、7世紀第IV四半期に出現する特殊な横穴式石室である。一見仏堂を思わせる玄門の構造は、造墓當時、併行して進行していた山王庵寺(放光寺跡)の整備が、大きく影響している。虚空藏塚古墳・安楽寺裏古墳と共に、その得意な横穴式石室は、横口式石槨を意識している。

宝塔山古墳・蛇穴山古墳が、加工石材を使用した巨石巨室墳であったことは、その成立期に一地域的所産であった加工石材の技法が、上毛野の上位集団に共通した意匠として、認識されたためであろう。在地の上位層を結集し、さらに彼らを代表して、中央の上部構造と対峙し、あるいは構成していた被葬者の姿を見ることができる。

逆に在地の各首長層は、宝塔山古墳・蛇穴山古墳への献納として石材を供給し、あるいは封土構築や、石材加工技師などの調達を通して、結集していったと考えられる。無論有機的な存在しか残らない考古学資料の限界では、その献納体制そのものを論することは困難だが、その一資料を提示することは可能であろう。

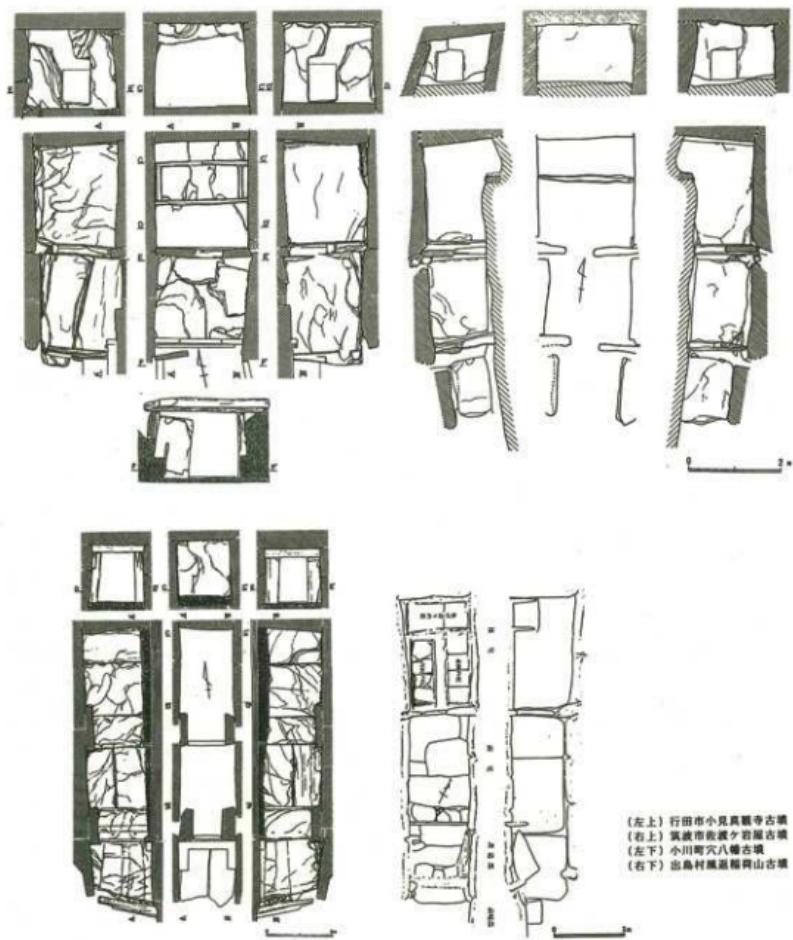
また石材の供給が、利根川左岸・赤城山西麓とともに類似した石材が存在していたにも関わらず、そこに触手が伸びなかった背景に、総社古墳群構築者層の出自と、在地首長層内部の葛藤をうかがうことができる。

### 第3節 埼玉古墳群の石材供給と上毛野

小見真觀寺古墳と、埼玉周辺の後期古墳の横穴式石室の石材供給について考えたい。

埼玉周辺では、地理的な条件から構造材となる大型石材の現地調達が不可能なため、横穴式石室の構築は、搬入石材に頼らざるえない。一般的に壁体は、角閃石安山岩の集合材で構成され、天井・奥壁などの構造材は、荒川上流の綠泥片岩が適用される。

埼玉周辺には、角閃石安山岩を利用した横穴式石室が、20基前後みられる。尾崎喜佐雄博士は、石材としての角閃石安山岩を自然石と、加工を加えた3面・5面の削り石と、6面体や複雑な加工を施した截石とに分類し、前者から後者へ変遷すると考えた。しかし実際は、比較的古相の小針鎧塚古墳や若王子古墳では、すでに技術的に完成した部材がみられる。あるいは、堀ノ内古墳や熊谷



第14図 地域を越え共通する横穴式石室

大塚古墳のように7世紀前半の古墳であっても加工度が低いことや、同時期の地蔵塚古墳などは秀致の加工をしている。このことは、加工度の差を時間差とするよりも、各古墳の横穴式石室が、優れて政治的・社会的な要因を内含していることを暗示しているよう。これは、角閃石安山岩の分析が、利根川流域に沿う自然的条件とは、全く次元の違うことである。

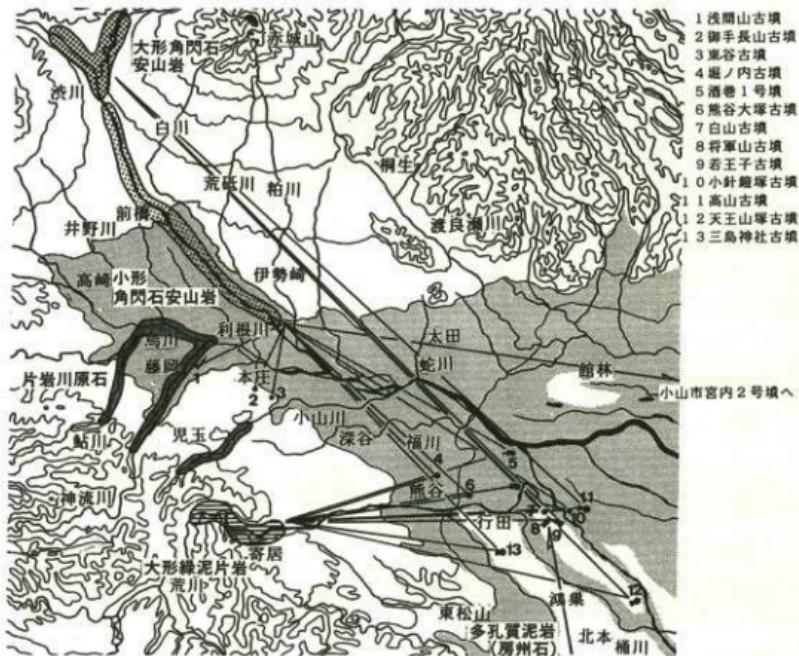
角閃石安山岩のみで構築された横穴式石室は、径20m前後の円墳（含方墳）に限られ、6世紀後業まで遡る。概して小型（30×30×30cm以下）の石材が使用され、いわゆる互目積みや通目積みの

（左上）行田市小見真理寺古墳  
（右上）氣波市佐渡ヶ若原古墳  
（左下）小川町穴八幡古墳  
（右下）出島村風呂根松岡山古墳

手法を探る。埼玉周辺の場合でも、上流の群馬県広瀬川沿いに分布する諸古墳と、手法的には同様であり、両者は、石室形態に若干の地域差があるだけで、基本的な製作技法そのものに地域差はない。ただし浮石質角閃石安山岩は多用され、硬質安山岩系の石材は避けられている。

一方、埼玉古墳群内で確実な横穴式石室は、将軍山古墳のみで、出土遺物から6世紀後葉に位置付けられている。角閃石安山岩の使用の有無は不明だが、いわゆる「房州石」が使用されていたという。古墳群中の他の古墳が不明なため何ともいえないが、将軍山古墳と前後する湮滅した若王子古墳は、緑泥片岩の巨石と角閃石安山岩を組み合わせた、おそらく胴張り複室タイプの横穴式石室で、この地域では、最も普遍的な形態であり、この形式の出現期に近い。

埼玉古墳群の解体期には、小見（真觀寺古墳）・真名板（高山古墳）・若小玉（若王子古墳）・吹上（三島神社古墳）・菖蒲（天王山塚古墳）に、100m級の大形前方後円墳が構築される。小見真觀寺古墳を除き、急速に発達する在地首長層は、もっとも強大な若王子古墳を盟主として分立し、かつ連合の形態を探る。連合の媒体は、一方で墳丘形態に独自の共通事項を設定し、他方で角閃石安山岩を使用し、共通した平面プランを保持する。そして角閃石安山岩は、形態や大きさなどから上流の前橋・高崎以北から調達されたと考えられる。しかし供給には、上毛野氏を代表とする首長層の承認と協力が得られなければ、不可能なのである。



第15図 北武藏の石材供給のネットワーク

また緑泥片岩は、普遍的な單一材として供給され続けており、氏族連合体の石としての使命を担っている。その大小は、運搬能力の差であり、さらに労働的賦荷の多少を示している。しかし荒川産の緑泥片岩系石材のみで構成された小見真觀寺古墳は、きわめて異質である。その形態的特徴は、約50km離れた筑波山麓周辺に分布する同種の古墳に酷似する（第14図）。

小見真觀寺古墳が、角閃石安山岩を使用できなかったことは、上毛野氏と石材供給の協力と承認が得られなかつたか、埼玉周辺の在地首長層内の紛争を含む意見の相違があつたためであろう。小見真觀寺古墳の被葬者は、星川（旧荒川）の水運を利用して緑泥片岩を上流から運び、埼玉以南へ供給する間に拠点をもつ在地首長で、星川の交通権を掌握していたのであろう。

ところで小見真觀寺古墳以降、二つの大きな動きがある。一方では、埴輪の消滅と平行した前方後円墳という墳形の消滅である。他方では、大形古墳の集約化、すなわち八幡山古墳や地蔵塚古墳などに限定していくことである。石材の取り扱い方から若王子古墳から系譜を引く八幡山古墳の横穴式石室は、胴張り三室構造である。7世紀前半に各地の方墳系大形古墳が、複室構造をもつことは、畿内集権の指導者層の横穴式石室の形式といわれる大和の石舞台・岩屋山式石室の展開と共通し、対抗する動きである。

比企を含む北武藏の場合、在地首長から村落首長に至るまで横穴式石室の形態が、複室構造である点から八幡山古墳の横穴式石室は、在地首長層との格差を付けるため、三室構造を取ったのであろう。この一つの空間が、在地首長層とその宗主権をもつ国造層との差であり、その主張がここにみられる。同時に乾漆棺を埋蔵することは、畿内の官人達の墓に共通する事象で、被葬者に、畿内政権の執政者により近い人物が考えられる。彼は、角閃石安山岩の供給に見られるように上毛野氏と氏族の連合関係も保持していたのであろう。おそらく『日本書紀』の推古天皇15（607）年冬の条にある「亦毎国置屯倉」など、東国の屯倉の管理を同時に担当した国造級の在地首長と考えられる。

このように考えてくると、小見真觀寺古墳の成立期に再び浮上してくるのが、『日本書紀』安閑天皇元年条の武藏国造をめぐる、笠原直の同族間の内紛の記事である。

その概要は、武藏国造の承認権をもつ上毛野君小熊が、笠原直小杵派を押し、その圧迫から笠原

西 暦	總 社	井野川下流	鳥川・碓氷川	甘樂	白 石	兎 玉	朝 倉
500	1 王山		12 鶴鳴二子塚				
550	2 沼尾山 3 墓原塚 4 高峰 5 墓原塚 6 鹿子山 7 五葉神社 8 緑ヶ岳山	4 善賀寺 9 小嵐山 10 五葉神社 11 白石山 12 八幡二子塚 13 石原根向山 14 石原根向山 15 八幡根原塚	16 木闇丘 17 木闇丘 18 太子宮 19 木闇丘 20 木闇丘 21 木闇丘 22 七岡山 23 藤原寺 24 白石二子山 25 藤原神社 26 木闇丘 27 北堀跡 28 南堀跡 29 木の木の足 30 生野山 31 秋山高砂山 32 宮原村 33 大仏二子山 34 木の木の足 35 前橋二子山 36 木の木の足 37 木の木の足 38 木の木の足 39 木の木の足 40 木の木の足				
600							

第16図 上毛野・北武藏の後期前方後円墳の変遷（1）

直使主派は、朝廷に援護を求め、武藏国造として承認される。これは、在地首長層間で国造を国造が承認しあっていた関係を畿内執務機関が関与し、国造の承認権を剥奪したことを物語っている。

従前よりこの記事は、屯倉の設置に伴う逸話として安閑紀に集中したと解釈されており、史実とするならば、次の理由からより下った段階と考えるのが妥当であろう。

安閑期（530年代）前後の埼玉古墳群の大形古墳の造墓は、きわめて安定した経営であった。それは、稻荷山一二子山一鉄砲山古墳と統く6世紀に、周辺に埼玉古墳群に匹敵する大形古墳が存在しないこと。この系譜が、立地・墳丘規模・形態等から、きわめてスムーズに政権交代が成されたであろうことが理由である。

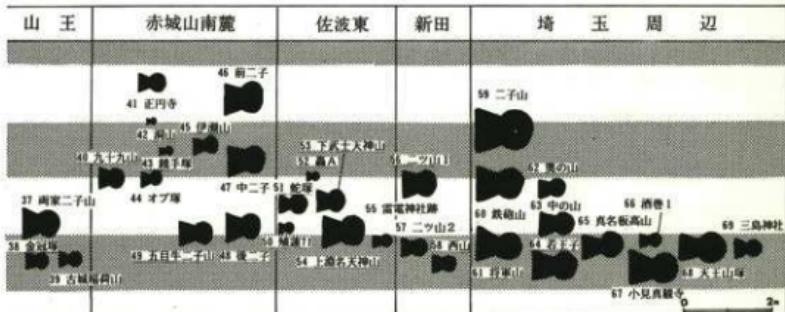
元来埼玉古墳群は、その成立当初から稻荷山古墳の辛亥銘鉄劍や、画文帶神獸鏡・腰帶具等の副葬品が示すように、5世紀末から6世紀初頭の畿内政権の「仗刀人首」としてその傘下に（あるいは先導的に）結び付いていた。それは雄略朝に物部・大伴といった伴造系の中小の在地首長層を、積極的に支配機構に組織していった一連の動きのなかでとらえられる。武藏における国造権は、東国国司詔が示す禁止事項から考えられる諸権利のほかに、埼玉古墳群成立事情に絡む東国の物部・大伴的、ことばを替えれば、在地首長層の行政監督権を含んでいたのであろう。

そして、筑波山麓周辺の同時期の宗主、出島村風返稻荷山古墳と小見真觀寺古墳のいくつかの共通点は、小見真觀寺古墳を除く埼玉周辺の古墳と上毛野との連動と対象的である。この両者がどのような理由で結び付いているかは別にしても、東国における前方後円墳の消滅期に国造を含む在地首長層、さらにその下部構造の村落首長層の構造的变化が進んでいたことは間違いないだろう。

そしてその要因は、元来アジア的共同体と首長制の持つ構造的弱点にあり、また半島・大陸の情勢に呼応した畿内集権体制の東国経営の触手が、そこに入り込んだためと考えられる。

### 第3章 6・7世紀の上部構造の生産関係—前方後円墳にかかる編成秩序—

上部構造の墳墓を媒体とする6・7世紀の結集形態は、墳丘・埋葬主体部・棺の型式に決定的に表現された。墳丘は、恒久的視覚表現体として、円形か方形かまたは、前方後円墳なのか歴然と判別された。下部構造の墳墓の封土が、埋葬主体部を覆うためだけに独り墳丘を亞せたり、基本形



第17図 上毛野・北武藏の後期前方後円墳（2）

態を無視していく中には、正円を描き、直線を重視し続ける。前方後円墳から方・円墳へ、形態の漸移的变化として成立したのではなく、上部構造の新しい結集形態へと転換し成立した。造墓の系譜が辿れる諸例は、転換後の選択肢が二方向存在し、両者は決して併存しないことは、評価すべきであろう。

埋葬主体部は、横穴式石室を基本形態とし、それまでに比較し、石材の大量化かつ大形化に伴う石材の供給が問題になった。石材の（あるいはその代用品の）安定的供給を確保するため、石材基地の設定の必要性から、各地首長間の交通は、より活性化し重視された。「氏族の石」が、各地共同体の供給地に出現し、石材の恒久的不足地域へは、交通を掌握していた首長層間で、より活発な経済的交換関係が成立していった。

棺は、ある特定の棺（南大和型家形石棺）は、共通する身分表象的所産として、大和を中心に結集していった人々の証左として存在した。加工技法の相違は、技術的系譜を設定でき、同一工人集団の存在と、発注していく在地首長層の姿をそこにレリーフしていく。

もはや盛土と土器（埴輪）で構成されたかつての労働編成は、さらに細分化・多角化し、しかも巨大なプロジェクトとして再編成が繰り返された。それは7世紀中葉以降、都城を築き、太宰府を整備し、狂心の渠や防衛施設の建設を推進させる原動力となり、有事の際は、軍事組織へと転化したものである。

墳丘と埋葬主体部、それに棺の三者の変化に、6・7世紀の上部構造の結集形態の変化が、投影されていると確信する。

### 第1節 墳丘—前方後円墳の齊一性とその後—

6世紀、上部構造を目指した墓前祭祀上の在地のヒエラルキーの確立は、前方後円墳の構築を通して恒久的な首長権継承を、集団へ誇示し認証したのであった。前方後円墳の齊一の造墓は、とりも直さず上部構造の結集形態を前提とし、各地の在地共同体の諸関係上に成立していた。それは一方で地域性として処理され、他方で普遍性の名の下に齊一性=統一国家論の骨格をなしてきた。

しかし、前方後円墳の造墓が、各地で跋行の変化をたどり、その終末にすらも統一性がみられない。そればかりか各地域の研究が深化するに従い、前方後円墳の存在の型に相当バラエティーがあり、一言で律し切れなくなってきた。違った意味で、前方後円墳の埋葬主体部の構築そのものに変化が訪れ、一墳二石室墳も登場する。

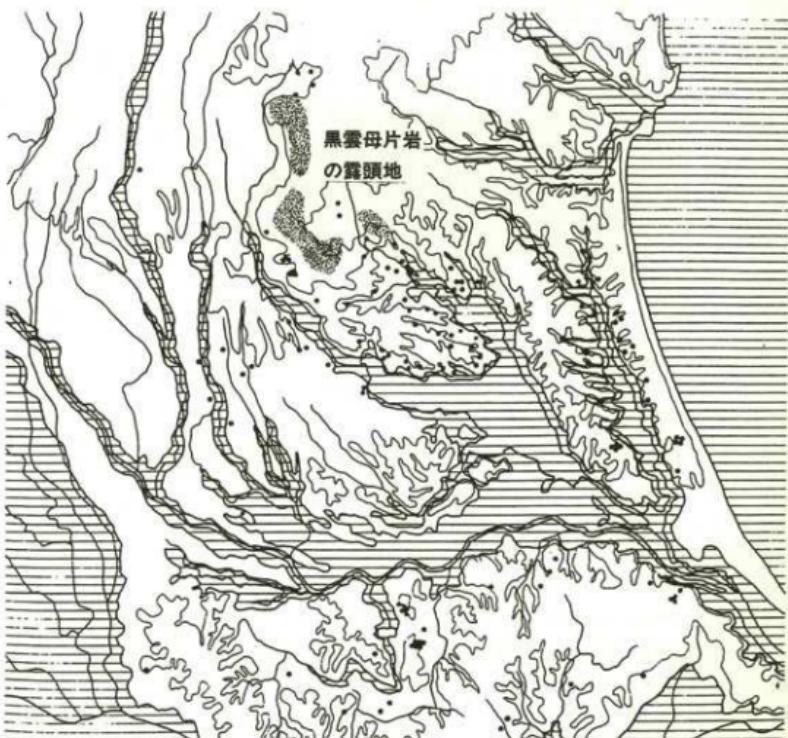
例えば滋賀県国分大塚古墳は、後円部と前方部に二つの横穴式石室を構築する。また同県八幡社古墳は、長軸に平行し、3つの横穴式石室を構築する。和歌山県岩橋郡長塚古墳や知事塚古墳・三重県鹿高神社1号墳・京都府天塚古墳・長野県馬背塚古墳・群馬県總社二子山古墳・埼玉県江南町野原古墳・栃木県二ツ室塚古墳なども同様に、いずれも前方後円墳の消滅期に該当する。それぞれ二次的・三次的な埋葬主体部を前方部やくびれ部に構築しており、当初から第2・第3の埋葬主体部は、計画されたのではなかったことを示している。

これは、横穴式石室を計画的に構築した双円墳（大阪府河南町金山古墳）や、方墳（石川県能登島町蝦夷穴古墳・千葉県栄町岩屋古墳）などの双墓系墳とは基本的に異系統である。双墓系墳は、

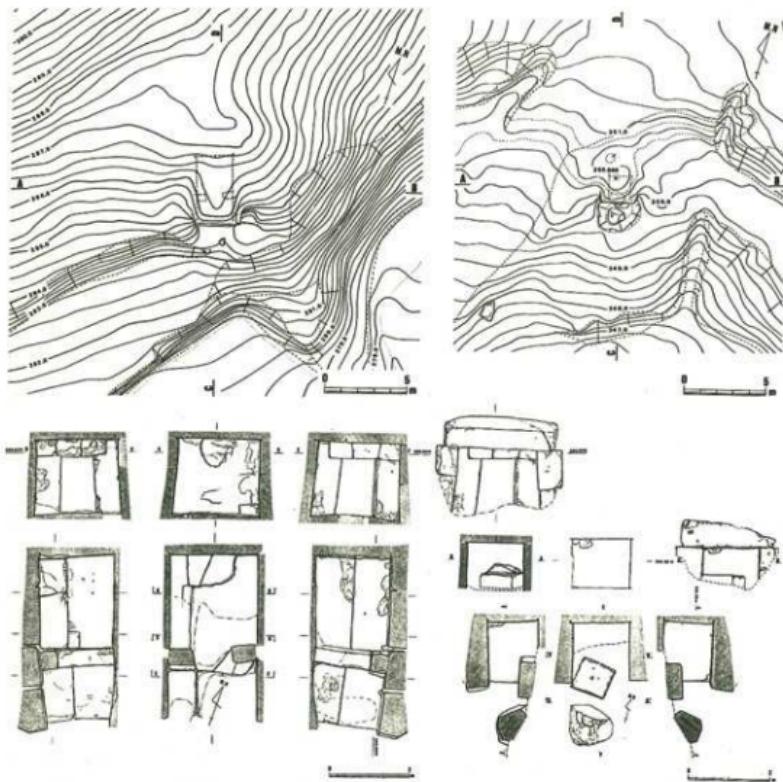
半島に系譜が求められ、のちに奈良県明日香村率午子塚古墳や益田岩船、あるいは桜井市舞谷3号墳などを生み出す母体となっていた。

前方後円墳の埋葬形式を変化させたこの現象は、とりも直さず前方後円墳が、上部構造の唯一の結集形態の象徴であったことを否定し、在地の諸条件と相まって成立したと考えたられよう。墳丘形態の変化が、前方後円墳の紐帯を否定したばかりではなく、地方に残存する独自性をも駆除し解体していった。決して前方後円墳が、一円的な上部構造の紐帯だったのではなく、葬送に伴い上部構造の個々の構成体が、地域的に結束した表現形態として、相互間で承認しあっていたのである。そのため交通は、一点集中ではなく多極に分散し、形態の転換は、紐帯の変化のみならず、構造的分化も促進させた。辺境は、その動きをよく示す。

南海諸国の在地首長層は、畿内や半島ばかりではなく、南西諸島や沖縄・台湾との交通を掌握した上部構造として推定できる。しかし6・7世紀の東アジア世界は、不安定な状況が、半島を含む東北部に集中していた。それを反映し、急速に国家形成への歩みをたどった北部九州側と南九州側とでは、異なる轍を歩んだ。南九州や土佐は、瀬戸内や半島から外れ、肉薄した国家の存亡から



第18図 黒雲母片岩の産出地と使用横穴式石室・箱式石棺の分布



第19図 辺境の終末期古墳 福島県玉川村宮ノ前古墳（左）と白川市谷地久保古墳（右）

離れ、南西諸島の末端として存在していたのであろう。

上部構造の抱える問題は、いかにその構成者を結集し、大國主義観で半島情勢を利用し、自己の再分配へ結びつけるかである。その遂行には、在来の巨大な地方の結集体を、武力をもって壊滅せよりも、その行動力を温存させ、これを上部構造の一部として吸収し、強固な構造体を形成する方向を選択していた。あえて辺境を吸收する必要はなかったのである。辺境が、同一の結集体に組み込まれていくのは、国家の政策の転換した7世紀後葉から8世紀以降である。

辺境の一つ、飛驒の6世紀代の展開は、飛驒宮川沿いの谷筋に小規模な前方後円墳が構築されただけであった。美濃に比べて極めて貧弱な展開に終った背景には、飛驒自信の抱える低い農業生産性とその地勢があった。しかし7世紀以降、飛驒が注目を集めるのは、大形の材木が宮や官衙で急速に需要を増したためである。おそらくこの段階で、木工を得手とする匠を中心とした労働の編成が、寺院の建立や宮都の造営を契機に自立的結集体として、急速に統合を進めたのであろう。そ

これは、単に畿内の在地首長層の下へ出向するだけでなく、木材の輸送をも掌握した在地首長層が、飛驒の各地に古代寺院を建立したことからもわかる。

逆に飛驒と対称的な伊那谷では、6～7世紀にかけて天竜川沿いの古墳の副葬品に馬具・鉄鎌・太刀等の優秀な製品が、多量に副葬される。ただし副葬品の優劣や多寡が、直接その被葬者の上部構造内の位置を示すとは限らない。無論、在地の共同体の諸関係の完結する場で、在地首長層の認証は、「地域」という平面的限定空間での再分配を前提としている。しかし地域を越えて相互比較することは、新羅王家の副葬品と日本大王家の副葬品を比較するようなことで、日本の大多数の「王」は、新羅の一般的な古墳にも劣ることとなる。地域対地域は、もともと異なるステージに存在し、これを無視し比較していくことは方法論的にも間違っている。

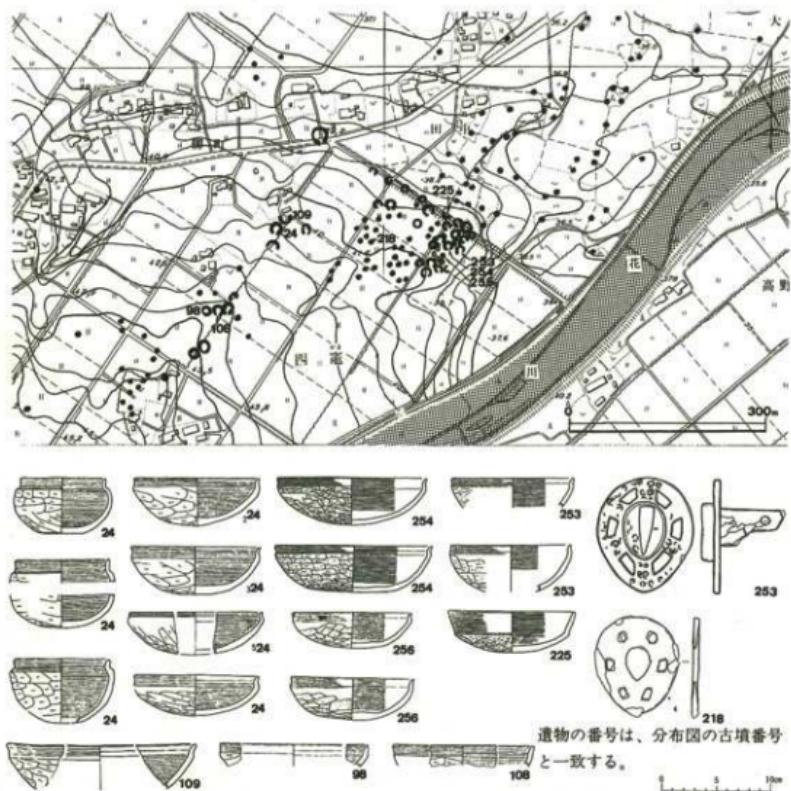
ところで、房総半島北部の印旛・手賀沼周辺では、6世紀末の最後の前方後円墳まで、箱式石棺を固執していた（第18図参照）。とくに竜角寺古墳群は、保守的であった。元来、房総半島北部から霞ヶ浦沿岸の地域は、良好な石材に枯欠していた。そのため石材は、軟質石材（凝灰岩）を切出す自給的な方法によるか、筑波山麓から板状剥離した黒雲母片岩を輸送しなければならなかつた。後者を選択した場合、在地首長層は、供給地側の筑波山麓の在地首長層と、何らかの需給協定を確保しておく必要があった。

それはこの地域の在地首長層が、箱式石棺を埋葬主体部の主要構造とする6世紀代に、土浦入や高浜入の前方後円墳を凌駕する古墳を、印旛・手賀沼周辺に構築しえなかつたことからもわかる。唯一独自の展開をした千葉県小見川市城山古墳群は、石材の加工技術と割石の使用が、その危機を回避させていた。半島系の須恵器や、豊富な副葬遺物を出土した城山1号墳は、その代表である。

前方後円墳の消滅と、前後して現われた加工石材の一般的な使用は、竜角寺古墳群で貝殻含凝灰岩の構築材の採用という形をとつて現われた。一辺90mの方墳、竜角寺岩屋古墳の出現である。先にも記したが、在地の結集体の内部で、他から傑出する必要があったから、墳丘規模に大小が生じたのであろう。前方後円墳から方・円墳の墳丘形態の選択枝が、上部構造の構造的变化を具象化していた。竜角寺岩屋古墳の埋葬主体部の出現が、以前の古墳からは系譜を引かないのもこのためである。

陸奥では、須賀川から白河にかけての肥沃な高原性平野の地域が、それを生産媒体とした在地首長層の存在と、陸奥と関東を繋ぐ交通の結節点であったことを予測させる。7世紀後半に新たに出現した福島県宮ノ前古墳や谷地久保古墳は、中央からの派遣官の墳墓と考えるよりも、在地の結集形態のなかで成長し、上毛野等を媒介として、畿内政権と東北との交通関係を掌握していた在地首長層との存在を推定できよう。それは工人集団を通して、彼らとの接触を機に再編成されたと考えられる。

やや下るが色麻古墳群（第20図参照）や仙台市郡山遺跡など、関東地方北西部との交通関係の存在を指摘できる出土土器の存在は、強力な政治装置の存在をその背景に考えておく必要がある。7世紀以降、急速に成長する横穴墓の展開と合せて、東北北部へ前進・浸透する群集墳の拠点的存在も移動を含む現象の一つといえる。8世紀に城柵が、政治的経済的収奪の拠点として各地に築かれる地場は、すでに7世紀代に成長しつつあったと考えられる。それは、在地首長層を急進的に結束



第20図 辺境の群集墳と関東系土師器（宮城県色麻町色麻古墳群）

していくための過程の一歩だったのである。

次に、この強力な政治装置を生み出す基盤となった、畿内の諸動向を考えたい。

大王家及び畿内王権の中枢首長層が、造墓を行なった大和・河内周辺のいわゆる畿内は、5世紀末から6世紀中葉にかけて、継続的に造墓された地域は少ない。そのなかでも、天理市北部に結集した強力な在地首長層は、石上大塚古墳・西見駒古墳・ウワナリ古墳・東見駒古墳・別所大塚古墳と連続して150m前後の前方後円墳の造墓を行なった唯一の地域である。

一方、最も規模の壮大な巨大古墳を、大王墓と認識するならば、今城塚古墳（揖津・新池窯産埴輪）・河内大塚古墳（河内・巨石巨室墳）・見瀬丸山古墳（大和・巨石巨室墳・埴輪無）・梅塚古墳（大和・宮内庁欽明陵）という過程をたどる。

大王墓とされる一群の造墓は、一定の地域に固執せず、造墓後の連動的造墓が漫透しなかった。一般的な在地首長層が、造墓を展開する場合、労働力は、曖昧ながらも組織化された下部構造を使

役してこそ、初めてその生産物としてとらえられる。しかし大王墓の場合、造墓の実行者に、上部構造の結集を行ないえる人格である在地首長層が、その背景に控えていることが肝要である。その彼らをバックボーンとして、大王及び大王家は、彼らからは常に超越した位置にあり、造墓を展開したと考えられる。それは、対外国との交通の掌握管理権を唯一、大王家とその家政機関が集中したためであり、その根底に供獻と再分配の方式が、常に息づいていたためである。

さて全国的視野で天理市北部のように、6世紀に継続的な大形前方後円墳の造墓の展開した地域は、山城の嵯峨野・筑前の今宿・筑後の浮羽・日向の西都原・新田原・出雲の上塙治・吉備の総社・紀伊の岩瀬千塚・伊勢の鈴鹿・信濃の伊那谷・武藏の埼玉・房総の富津・板付・常陸の霞ヶ浦高浜入・岩代の須賀川などの流域である。

従来、集中する6世紀代の前方後円墳は、契機的な造墓地域として、大和朝廷から物部・大伴氏を代表とする伴造系氏族の派遣が説明されたり、大和朝廷が、地方首長層を掌握する手段として、墳丘の形態規模を含む造墓規制を強化したことを説明していた。つまりある在地首長層の造墓にあたり、前方後円形を承認する権力の存在、この絶対的権力が、各首長層を連合した頂点に立つ大和朝廷を構成するメンバー（上部構造）によって牛耳られていたとするのである。このように6世紀代の前方後円墳群は、5世紀代の古墳群と異なった系譜に成立基盤をもち、両者は整合し難い。

一方6世紀以降、前方後円墳から円墳へ造墓が展開する地域もある。播磨の千種川周辺・但馬の円山川流域・若狭の中央部・甲斐の北部・武藏の比企などである。また出雲の東部や丹波などは、前方後円（方）墳から方墳への転換が指摘される地域である。さらに6世紀には、突如出現し衰退していく地域がしばしば見られる。その複雑な様相は、前方後円墳が、上部構造の造墓に求めた表象表現として、墳丘形態に一円的な採用方法を探っていた5世紀代から、その構成者の一部が、円墳・方墳築造者層（下位集團）への転落と、新興する首長層の存在を表現しているように見える。

しかし一様でない墳丘形態の変化は、地域内の共同体的諸関係を貫徹させる在地首長層が、他の地域の在地首長層との均衡関係を保持していく結果と解釈できる。つまり上部構造内部の構造的变化がそこに見出せ、5世紀とは、違った結集体として認識できよう。6世紀代の在地首長層の墳墓が、前方後円墳・方墳・円墳へと分解（再編成）し、より地域結合体としての色彩を強めた。それは、逆に彼らを繋ぎ止める手段が、馬具・武具・環頭太刀そして金銅製冠帽に代表される装身具類の供与であり、巨大な石材を運搬・加工・架構する技術の伝授であったと考えられる。

6世紀代巨大古墳（大王墓）の系譜が、前方後円形を頑なに守り続け、しかも同時期の大形古墳に比較しても、二倍近くの規模をとり続けていたことは、上部構造の共通した認識に、とくに卓越したカリスマ的存在の大王を創出しておく必要があったためであろう。

問題は、上部構造のこの認識の変化にある。6世紀末に訪れた卓越した巨大古墳の消滅である。上部構造の単体である個々が、たとえ残存的に前方後円墳を造墓していたとしても、それは地域内の結集形態のなかに埋没してしまう。しかし上部構造が、共通承認する大王の墳墓が、一般的墳墓と同程度の規模としたら、違った隔絶の表象原理を与えなくてはならない。つまり、見瀬丸山古墳以降、途絶した巨大前方後円墳から系譜を引く古墳の出現原理である。一般的には梅山古墳が、見瀬丸山古墳に後続して構築したとされる。巨大古墳の様相は、奇しくも示していない。見瀬丸山古

墳が、6世紀後葉の造墓とすると、相対し出現する大形方墳が、次代の大王墓であろう。

畿内でも大形方墳は、飛鳥・桜井・平群・河内飛鳥に展開され、この一角が6世紀末から7世紀の政治舞台として、上部構造内でもトップクラスのメンバーが、墓域として選択した地域である。またこの転換は、やや遅れて地方の大形首長墓を変化させた。大王墓の変化が、上部構造の一般者の造墓に先行することは、むしろ当然であって、そのモデルが、再分配していく過程で、整理されていった。各地域の在地首長層の個々のプロセスを反映し、新たな統廃合（再編成）を独自に展開させていた。

6世紀後葉、無視できない存在として成長してきた石工集団は、石室石材・石棺・礎石等の需要が増すなかで、自立的存在として、石工技術を求めて各在地首長層に保護されていく。畿内の場合、播磨の竜山石が、その動向を最も的確にとらえている。竜山石の加工集団は、6世紀後葉の段階では、大和南部（葛城・飛鳥）に家形石棺を供給していたが、6世紀末から7世紀前葉には、大和南部と河内飛鳥、さらに7世紀中葉から後葉には、淀川水系の山城から近江にまで版図を広げた。

竜山石製の家形石棺は、公葬用とまで表現される（註50）ほど、畿内の該期の大形古墳に供給されている。この加工集団は、「岩屋山式横穴式石室」を製作した石工集団と、6世紀以後の、……同一組織内に組み込まれていた石工集団である可能性が高い」と、和田晴吾氏が指摘するように、はたして石工集団は、石材の産地で自生するものではなく、石材の供給から墳丘構築、そして横穴式石室の構築まで職掌していたといえるだろうか。

この考え方は、造墓のシステムを一貫して土師部が、仕切っていたという古くからの説と同様、にわかに承服しかねる。それは、多くの土木建築がそうであるように、古墳の造営も一種類の単純労働の積み重ねではなく、複数の異なった作業工程と、方法の組み合わせから成立している。

また兵庫県高砂市にある家形石棺の竜山石の採掘地は、畿内から北九州に至る6～7世紀の家形石棺の基地でもあった。播磨には、300例に及ぶ竜山石製の家形石棺があるといい、他の地域のそれの総数が、100余例というから、これを畿内の大王家の一元的支配の下に製作されたというより、この地域の在地内製品が、交通を掌握した首長層によって交換され流通したと考えた方が良い。

古墳の造営よりも単純と思われる渠溝でさえも、例えば齊明天皇「狂心の渠」の記事が示すように、労働形態の相違によって、「水工」や「石工」などに分掌されていた。無論、「水工」や「石工」自身も、直接肉体的労働を奉獻する人々や、彼らを結束する人々、及び技師、そして彼らを総括し使役する人々といった組織に個々が結束され、総体として存在していたわけで、直接個人身的に使役されていたわけではない。

各プロジェクトの分割的作業分掌制は、古墳の墳丘に葺石を葺上げるための分割線の存在や、同一古墳に配置された異種工人の埴輪が、一連の埴輪列として意味をなす配列を形成することなどを上げるまでもなく、6世紀に入ると活発に進展した。むしろその契機は、大形石材の採取・運搬・加工・構築を通じた横穴式石室の構築と、それに付随した諸技術の進歩にあったといえよう。造墓に関して言えば、横穴式石室の一円的構築こそ、労働を分割分掌的に編成させたキーワードであり、弥生時代以来の伝統的造墓を払拭する画期的な変化であった（註51）。

確かに6世紀の最も巨大なプロジェクトであった造墓を、限定された一集団へ委任することは、

その集団への諸権益の集中を意味することであった。逆に各事業を個別の事業に分割し、現在の共同企業体的なシステムのように、各担当が分掌していたと考えられないだろうか。

大王墓が、まさしく隔絶した一個の頂点としての天皇陵へ転化していくには、天智天皇陵の造営が、契機となつていいよう。天智天皇陵は、京都府山科に位置する。一辺70mの上円下方墳とも八角墳とも言われ、光城「方四町」と『延喜式』に記されている。この造営は、山科古窯跡群の操業停止と、製鉄産業の停止、そして移動を前提に進められた。おそらく「陶原の館」をもつ、中臣鎌足の家産の生産機構だった山科古窯跡群の移動は、他への拡散的影響をもつたであろう。

天皇陵の造営が、既存の地場産業を飲み込んでまで断行されたことは、造京や造寺（あるいはすでに石舞台古墳にもみられる）に代表される国家的プロジェクトとして、進展していた証左といえよう。やや下るが、天武天皇陵が飛鳥に造営される際、諸国の「国造」が動員を受け、諸国の仕丁と共に造墓に参画している。これは、国家的プロジェクトとしての造墓（あえて「公葬」と呼ばない）が、在地首長層としての国造の持っていた臨時ににおける役員賦課権を、援用しつつ実行した結果である。国家が、集中する労働力（徭役）を従来の職能をもとに再編成し、さらに分割分掌させていった賜物が、天皇陵なのである。

上円下方墳、あるいは八角墳と呼ばれる前代未聞の墳形の創出は、6世紀末から7世紀中葉までの方墳か円墳という、半島や大陸あるいは列島内に普遍的に存在した形態から逸脱していく。国家を代表する天皇が、諸々の王から傑出していく過程は、東アジア世界の動揺と密接に連動し、半島諸国に大國主義を徹底する原動力でもあった。

百濟の滅亡への歩みは、列島内の上部構造の交通を活性化させ、その内部構造自体に変化があったことはすでに論じた。とくに前方後円墳の消滅が一様でなく、転換する過程でも選択にバラエティーが存在していた。方墳か円墳かを選択することが、蘇我系か反蘇我系かを識別する指標なのではない（註52）。

前方後円墳が、地域内の在地首長層の身分表象として、否定されていく過程は、考古学的には不可視的な、あるいは身体自身の身分表象への転化であって、カバネ制や衣服令の成立が、互換的関係をもって上部構造に受け入れられた。大王墓から天皇陵への転換は、前方後円墳による秩序の徹が、不能化していった結果である。横穴式石室の登場からすでに、埴輪を含む樹物（タテモノ）の配置と墓前祭祀の形態に混乱が起きていたのである。前方後円形の墳丘が、唯一首長権の継承の場であった時代から、横穴式石室の内外に継承の場が移動したため、敢てその形態が重要でなくなってきた。さらに群集墳構築層への前方後円墳の認可は、上部構造を認識する場の掛け離れに拍車を掛けた。

そこで模索された新たな紐帯が、半島・大陸の王の墳墓の形態である大形の円墳と方墳だったのであろう。ここで注目されるのが、6世紀後葉以降に急速に墓域を形成していく集団である。とくに大和東南部（桜井・泊瀬）と河内飛鳥周辺である。大形方・円墳と巨石巨室墳、そして家形石棺とは、互いに不可欠の関係にあり、この地域は6世紀後葉の大形前方後円墳が存在しない。自生的な連続的系譜を持たずして大形古墳が成立していく背景には、国家の中核機構を担う首長層の存在と、彼らが手工業を中心とした技能集団を、バックボーンとしていたことを認める必要があろう。

新たな上部構造の編成は、こうした首長層を中心に旧来の諸矛盾を排除し、各地の在地首長層が模索し、方向を選択していく中で決定されていった。無論ある一氏族が、伝統的に方墳を造墓していたという痕跡を探すことは難しい。むしろ急変する政治的変化のなかで、各在地首長層が、自己の存在と立場を主張する必要とその場こそが、終末期古墳の築造であったのであろう。

## 小 結

以上6世紀から7世紀にみられた基本的な結集形態の単位を瞥見し、当時の共同体的諸関係を認証する場である古墳を軸に、それぞれの領域を考えた。

まず本稿では、最も小さな単位を、赤城山南麓に共通する墓前祭祀の一形態に求め、6世紀末にその転換があり、7世紀を貫徹し固持され続けたことを確認した。異なる群集墳が、共通する事象によって括ることは、在地の結集が、単に個々の集落では完結しておらず、他の集落との連絡を絶えずとり続けていたことを示す。

この時期活発化してくる交通は、実態としての交通路を充実させ、個々の集落間に農耕集落というだけでなく、種々の性格が付されていく。同時に群集墳もその影響を受ける。各支群は、帰属する集落と、不可分の関係にあり（ただし必ずしも1対1ではないが）、その単位が基本であることは無論、各支群あるいは個々の古墳の被葬者がそうであることは当然である。しかしここで問題としているのは、こうした各在地共同体を代表した在地首長層が、共同体的諸関係を完結するエリアを認識することである。現象形態として認識される個々の事象の多くが、空虚な文献では求められない民衆レベルだからである。

次にこうしたエリアをもった在地首長層が、他の隣接する同レベルの中で、どのように結集し拮抗していったかを、上毛野・武藏を話題に考えた。そこで問題としたのが、横穴式石室とくに巨石巨室墳の造墓と、石材の入手経路である。横穴式石室の構築は、在地首長層にとってきわめて重要な認証手段の一つであった。その大形石材の確保は、生産性の高い広大な沖積平野へ進出していった在地首長層にとって、しのぎを削る状態であった。

在地の共同体的諸関係の完結する場に、石材を求めることができた上毛野の諸在地首長と、求められなかった北武藏の在地首長層の関係は、石材供給の提携をめぐり、葛藤のあったことを推測させる。一方石材の供給圏は、個々の領域を反映し7世紀へ受け継がれる。

そして最後に本稿では、全国的な動向のなかで前方後円墳・円墳・方墳といった墳形の相違が、出現する6世紀、そこに新たな上部構造の結集形態の出現をみ、変容していく在地首長層の姿を探った。そこでは、活発化する東アジアの情勢のなかで、再編成されていく姿が映し出されてきた。

前にも述べたが、在地首長層の経済的交換関係と、その領域を示す横穴式石室との検討や、上部構造の身分表象を示すであろう家形石棺の流通の問題、さらに半島や諸々の在地首長層から献納され集中し、再分配される副葬品の問題や、土器などの生産関係の問題などを、次号では考えたく思っている。

最後になりましたが、本稿を草するにあたり、資料調査を快く受け入れていただいた各所有者の

方々各市町村担当職員の方々、調査にご協力頂いた考古学専攻の学生諸君には、心から感謝し御礼に代えさせていただきます。また赤城山南麓の古墳についてご教示頂いた前橋市・伊勢崎市・赤堀村・新里村の各教育委員会の方々には資料の提供等、大変感謝しております。団版作成・浄書の際に、坂本ますえ・藤田貴美江・荒船敦子・山口勝巳・三木弓彦の諸氏に御世話になりました。当埋蔵文化財調査事業団の職員の方々には、日頃から多くのご教示を受けていることを記し感謝に代えたいと思います。

### 〈註〉

- 1 水野正好「群集墳と古墳の終焉」『古代の日本』5 1972年
- 2 和田萃「殯の基礎的考察」『論集終末期古墳』塙書房 1973年
- 3 例えば、横穴式石室の前の空間に、破碎された土器が散乱した状態で出土したり、横穴式石室を土や石で充填した後に壺形土器で蓋をしていること。あるいは兵庫県榎貸塚古墳のように、石室内に蓋をした壺の中に、桃の種子があったことなど。細かく調べていけば、ある程度は墓前祭祀上の諸行動が、少しづつでもわかっている。
- 4 『小稻荷遺跡』前橋市教育委員会 1987年
- 5 『富田遺跡群・西大室遺跡群・清里南部遺跡群』前橋文化財研究会 1980年
- 6 『柳久保遺跡群Ⅲ』前橋市埋蔵文化財発掘調査団 1986年
- 7 『西大室遺跡群Ⅱ』前橋市教育委員会 1983年
- 8 『荒砥二之堰遺跡』財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団 1985年
- 9 『荒砥北原遺跡・今井神社古墳群・荒砥青柳遺跡』財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 10 『赤堀村地蔵山の古墳1・2』赤堀村教育委員会 1977・1980年
- 11 『下触牛伏遺跡』財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団 1986年
- 12 『八幡林古墳群及び縄文住居跡調査概報』赤堀村教育委員会 1981年
- 13 『今井北原古墳及び住居跡発掘調査概報』赤堀村教育委員会 1980年
- 14 『赤堀村峯岸山の古墳1・2』赤堀村教育委員会 1975・1976年
- 15 『書上上原之城遺跡の古墳』『書上下吉祥寺遺跡・書上上原之城遺跡・上植木宅町田遺跡』財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団 1988年
- 16 『蟹沼東古墳群』六冊 伊勢崎市教育委員会 1978・1979・1980・1981・1981・1988年
- 17 『宮戸古墳群・蟹沼東古墳群』伊勢崎市教育委員会 1988年
- 18 『西原古墳群K5』柏川村教育委員会 1985年
- 19 『白藤・新宿C1・C2』柏川村教育委員会 1983年
- 20 『月田古墳群B1』柏川村教育委員会 1982年
- 21 能登健氏等は、赤城山南麓に展開した集落を、弥生時代から開発を継続した伝統集落と、6世紀以後、溜池灌漑を基本に成立した第一次新聞集落、さらに奈良・平安時代に「ひえ堀」の設置から成立した第二次新聞集落の3段階に分類した。そしてこの発展形態をとる集落を里権み集落と呼び、これと対比させた平安時代以降の山間部の集落を、山権み集落と呼んだ。

- 能登健・石坂茂・小島敦子・徳江秀夫「赤城山南麓における遺跡群研究」『信濃』34巻4号 1983年
- 能登健「群馬県下における埋没田畠調査の現状と課題」『群馬県史研究』17号 1983年
- 松島栄治・能登健・洞口正史・小島敦子・坂口一「熊倉遺跡」六合村教育委員会 1984年
- 能登健「集落変遷からみた農耕地域拡大のプロセス—遺跡分布調査による新しい集落分析の展開—」『地方史研究』34巻5号 1984年
- 22 「群馬県史跡名勝天然記念物調査報告 第五輯」群馬県 1935年
- 23 ただし7世紀前葉までに造墓が、停止する墓域では、この限りではない。ここでは、前庭状ピットをもつ古墳の造墓が、古墳群開始時から成立したタイプは、無かったことを確認しておきたい。
- 24 下触牛伏1号墳の副葬品には、以下がある。前庭理土中から須恵器甕・大甕、玄門右袖隅から長頸壺(2)提瓶・壺、鉄鍛62本、鉄釘43本、蕨手刀・直刀・刀子である。
- 25 この七ツ石古墳群の西約300mで山武考古学研究所が、1988年に調査された小幡荷遺跡では、切石積みの横穴式石室が確認された。前庭状ピットは確認されなかった。この古墳を今までの年代観の中だとすると、7世紀後半に位置付けられる。この段階この地域の大形古墳も、前庭状ピットを基本的には付設しており、この古墳の独自性がうかがえる。
- 26 この段階の土器編年については、上野国分寺中間地域の検討を参考にさせていただいた。
- 27 右島和夫「群馬県における初期横穴式石室」『古文化談叢』12 1983年
- 28 白石太一郎「伊那谷の横穴式石室」『信濃』第40巻7・8号 1988年  
川原石の平石を積んだ横穴式石室は、群馬県の初期横穴式石室の基本的な特徴である。石材が散乱するのみだが、高崎市八幡二子山古墳や、児玉町諏訪山古墳・神川村北塚原3号墳・伊勢崎市お富士山3号墳などもその範疇に加えられよう。これからもMT15型式併行の須恵器や埴輪が確認されている。
- 29 神沢川の左岸に下大屋伊勢山古墳が立地するが、片袖型石室であることや、埴輪をもつことから後二子古墳よりも先行する古墳であろう。
- 30 松本浩一「群馬県における横穴式石室の前庭について」『古代学研究』80号 1976年
- 31 いまここで追尋のパターンや基本的論理を論述する用意はないが、将来人骨の分析から血統関係を推定していくことも可能であろう。
- 32 福岡県鶴崎古墳では、3つの棺床が「コ」の字型に配されていた。
- 33 ここでいう巨石巨室墳は、同時期に構築された群集墳内の横穴式石室、あるいはそれに類する諸例との比較の上で設定した。厳密な数値の上から汎列島的に設定したのではない。
- 34 白石七奥山古墳は、未開口で出土遺物もなく不明瞭だが、C種横ハケの二次調整の埴輪、低位置凸帯の埴輪の存在、また後円部に均衡する前方部の高さなどから6世紀第Ⅲ四半期に位置付けられる。後円部の東半分が削られているが、埋葬主体部は出でていない。おそらく相当な大形石室と考えられる。
- 35 総社古墳群の東端に位置し、安山岩系の巨大な石材（おそらく天井石）が、後円部に露出している。二次調整の見られる埴輪はないが、形象埴輪を含む遺物が採集されている。全長70m内外の古墳。
- 36 蛇塚古墳は、輝石安山岩系の巨石を用いた袖無型石室である。入口から奥壁に至るまで中心軸は、カーブを描いている。巨石巨室墳では、萌芽的な古墳である。
- 37 白石太一郎「岩屋山式石室について」『ヒストリア』第49号 1967年

- 38 ここでは石材に限らず、須恵器や、土師器あるいは金銅製品等をも含めた考古学的に実証できるあらゆる交通媒体を指すこととする。
- 39 群馬県の横穴式石室の中では、櫛石のある古墳は、6世紀後半におさまる。具体的には、榛東村高塚古墳・藤岡市皇子塚古墳などがあり、おそらく石梁の構築系譜を引くのであろう。
- 尾崎喜左雄『横穴式古墳の研究』吉川弘文館 1967年
- 40 註39文献
- 41 五目牛二子山古墳は、全長100mの大形前方後円墳であったが、調査以前に一夜のうちに破壊され、灰塵と化してしまった。埋葬主体部は、輝石安山岩の巨石を使用した巨石巨室墳であったようで、現在もこの古墳の使用石材が、岡部工業の庭園の築山の一部として残っている。なお梅沢重昭氏は、「全長120m余の前方後円墳であり、その墳丘形態は、他の群馬県域の5世紀前半のものに共通している。五目牛二子山古墳を5世紀前半のものとすると、赤城山南麓地域での古墳時代初期からの地域首長墓の発展はスムーズな展開がうかがわれ」とされているが、極めて曖昧な消滅した古墳を、地籍図の形態から資料批判無しに5世紀前半とすることには承服しかねる。
- 梅沢重昭『日本の古代遺跡16—群東部—』保育社 1987年
- 42 また後二子古墳は、墳丘の第一段が、広いテラス状にめぐっており、下毛野南部の田川・姿川流域のいわゆる「基壇状」に近似する。同様な例は、新田町二ツ山1号墳にもみられるが、こうした現象形態が、共通するといつても、その使用目的や方法の考察を通して在地首長層の結集を解き明かさずには、単なる共通性を指摘するだけでは、全く意味がない。
- 43 太田市駒形埴輪窯では、焼成された家・人物・器材・馬等の埴輪と円筒埴輪が、聞いたし字状に正面に隙間なく立て並べられた状態で出土している。新聞報道による。埴輪が、粘土採掘→成形→焼成→古墳への供給(消費)という生産体制を探るといつてあれば、最後の消費の段階が結論的には、執行されなかつたことを示している。この出土埴輪は、川西編年V期に相当し、6世紀後半のなかでおさえられる。この段階に駒形窯を供給源とする需要者側に政治的変動が起り、墳墓への搬出が停止されたのであろう。しかしこの埴輪群は、全関東地方的視野で観察した限りでは、決して最終末の形態ではなく、むしろそれより一段階古いと考えられる。埴輪の樹立が、一円的、一時期的ではなく、段階的でしかも細かなタイムスケールのなかで、総括的に否定されていった一つの証明といえよう。
- 44 田中広明「終末期古墳の地域性」「土曜考古」12号 1987年
- 45 終末期古墳の概念についてはすでに述べているが、ここでもその考え方方に立っている。つまり古墳時代という名称が、貫徹して守られてきた、上部構造の結集形態のモニュメントとしての古墳の存在を、重視し、前方後円墳がその構造を反映した段階と、それ以降の段階、すなわち古墳時代終末期を設定しえると考える。そのため終末期古墳も上部構造の墳墓に限定され、群集化していく小規模な古墳や粗雑な小石室などは、この限ではない。群集墳は、下部構造の共通する墳墓形態として設定していく必要があろう。
- 46 尾崎喜左雄博士の名称法による呼称である。博士は、「切石」「裁石」と「削石」の三種を設定されているが、この区別は不明瞭であり、筆者は、総括して加工石材として扱っている。
- 47 松本浩一「末期古墳の特質たる玄門の関する一考察」「群大史学」5 1963年

- 48 藤井利章「家形石棺と古代氏族」『檍原考古学研究所論集』第4 1979年
- 50 林部均「飛鳥時代古墳の地域性」『檍原考古学研究所紀要』第11冊 1985年
- 51 和田晴吾「畿内の家形石棺」『史林』59巻 3号 1976年
- 間壁忠彦・間壁蘿子「石材からみた近江と畿内の家形石棺」『倉敷考古館研究集報』第12号 1976年
- 参考文献については次号に掲載する。

## 研究紀要 第5号

1989

平成元年3月25日 印刷

平成元年3月31日 発行

発行 財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団

〒331 大宮市桜引町2-499 048-652-2231

印刷 新日本印刷株式会社